
不变の意思を持つ凡人は高みに上る

ダメ中年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不变の意思を持つ凡人は高みに上る

【NZコード】

N5547Y

【作者名】

ダメ中年

【あらすじ】

麻帆良に住む一般人のとある男子生徒。学年の代表生徒である事以外は、全くもって普通である。代表といっても、体のいいパシリだ。そんな彼が、色んな偶然が重なった結果、「闇の福音」であるエヴァンジェリンと出会ってしまった。その切欠で、裏側の世界を知る事に。そんな彼は確固たる意思をもつて、自らその世界に踏み込んで行く。曲がらず、折れず、流されず。そんなたつた一つ不变の意思を持つて突き進む！

作者は小説初めてです。暖かく見守つて頂けると幸いです。

PV90000突破しました。

ユーチ10000突破しました。

有難う御座います！

プロローグ（改）（前書き）

初めまして。ダメ中年と申します。

作者は小説初めてです。

誤字、脱字、アドバイス、感想を頂けると嬉しいです。

批判も有りだと思います。只、感情に任せた物ではなく、どこがどうダメなのか、教えて頂けると勉強になります。

作者のLPは一桁です。皆様、優しさライセンスを持つて、接して頂けると幸いです。

何卒ご指導の程宜しくお願い申し上げます。
では、どうぞ。

プロローグ（改）

1

「……どうした？もうギブアップか？」

そう挑発するように、エヴァンジエリンは言った。

そんな問いかに、肯定の意が返ってくる事などありえない事は承知の上でだが。

田の前で四つん這いになりながら、息を荒くしている少年は、頑固で一途なのだ。

そんな事は、自分が一番よく知っている。この麻帆良に住んでいる誰よりも。

現に自分を見上げるその瞳には、強い意志を感じられる。

「そんな事……ある訳……ないでしょ？」

少年は立ち上がりながら、確固たる口調で言つた。エヴァンジエリンはニヤリ、と口角を吊り上げた。

「では、もう一度だ。構える」

少年は僅かに腰を落とし構えた。エヴァンジエリンは淀みなく、最速の一歩を踏み出しその顔面に掌底を繰り出す。

身長差がある為、繰り出されたその一撃は下から顎に向かつて最短の距離をもつて向かってくる。

その一撃を少年はスウェーをして避ける。追撃を予測した少年は、間髪いれずにバックステップをした。

エヴァンジエリンは、先程の一歩よりも遙かに早い踏み込みをもつて追撃する。

少年が着地した瞬間にはエヴァンジエリンは既に少年の懷に入っていた。彼の鳩尾に手を添える。

短い呼氣と共に吐き出された一撃を、少年は身体を半円を描くようにかわし、その遠心力を乗せた肘を繰り出す。

エヴァンジエリンはその力の乗った肘鉄を、下から掌底で撃ち突けるようにして軌道をずらす。

「モラッタゼッ！」

その声と共に、エヴァンジエリンの背中から飛び出してきた様に、チャチャゼロが切り掛かった。

少年は軌道をずらされた肘を打ち下ろす様に、チャチャゼロに叩き突ける。

飛び出したチャチャゼロは、出会い頭に向ってきた肘に打たれ、地面に叩きつけられた。

僅かにバウンドしたチャチャゼロに向かつて、少年はトゥーキックの要領で追い討ちをかける。

「甘いッ！」

エヴァンジエリンは、その一撃と共に両手を重ね、凶悪な双掌打を繰り出す。

「ツー！」

その一撃を受け、少年はそのままの姿勢で砂埃を巻き上げながら後退した。

その間にチャチャゼロは体勢を立て直す。

「スマネエ、ゴシュジン」

「フン、油断しそぎだな。チャチャゼロ」

チャチャゼロは、首をコキコキ鳴らした。

「チャチャゼロが潜んでいた事は、知っていたのか」

僅かに目を細め、ニヤッと笑う。

「知つてはいませんでしたが、見える範囲にいないとこう事は、そういうことでしょう？」

微塵も警戒を解くことなく答える。

「お前の後ろにいたかも知れんぞ?」

「ヤニヤしながら、試すようになづく。」

「気配がありませんでした。それに後ろにいるならば、バックステップのタイミングで挾撃出来たでしょう？故に、エヴァの後ろにいる事は明白です」

そのセリフには確固たる自信が伺える。

「可愛げがない。つまらん」

腕を組み、眉間に皺を寄せる。その姿を見て少年は、そういう問題ではないでしょ、と呟いた。

「まあ、お前は最初から可愛げがなかつたがな」

今更始まつた事じやないか、と眉間の皺を深くした。

「まあいい。仕切り直しどこいつか。茶々丸、お前も加われ」

その一言に「はい、マスター」と離れて控えていた茶々丸が歩いてきた。

「今度は3人ですか……。一気に難易度が上がりますね……」

少年は、軽く深呼吸をして気合を入れなおす。

「何だ？ギブアップでもするか？」

先程と似たセリフ。ただ今度は言外に、いいのだぞ？やめても、と匂わす。返ってくる答えは解りきっているが。

「そんな事ある訳ないでしょ？」

「こちらは先程と同じセリフ。言外に、解つていて聞いているんでしょう？」と匂わす。

数瞬のうち、同時に構える。その動きに合わせて、彼女の従者達は散開した。

「今日は、この辺で終わりだ」

少年は彼女の足元で大の字に倒れていた。激しく胸が上下している。

ゼエゼエ、と呼吸が荒い。呼吸だけではなく、服はボロボロでいたるところに血痕、体には擦り傷、切り傷、火傷と満身創痍、とう言葉がぴったりだ。

「ああ……ありがとう……」

それだけ言うのがやつと、と言った感じだ。

「ほら、これを飲んで傷を治せ」

そう言つて治療薬を差し出す。

「いや……それはいいですよ。エヴァ」

起き上がりながら僅かに首を振り拒否をする。

「バカか！お前は！その様な体でどうしようと言つのだ！」

眉根を吊り上げ激昂し、エヴァは無理やり飲ませようとする。それに対し、頑なに拒否する少年。

「大丈夫です。僕はこのまま帰るつもりなので。」

それを飲んだら意味がないでしょう、と言い切る。エヴァは余計に意味がわからん！と眉根を寄せた。

エヴァがトレーニング、戦闘技術、経験、魔法や気の教授などの全てにおいてメニューを組んで教えていく。

無駄のないよう、効率よく、最短で高みへ、と。しっかりと、傷を癒すのもまた鍛錬の一環。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルという存在は、ヒトという種ではなく、吸血鬼というヒトに似て、決してヒトではない生物。

エヴァ自身ヒトでない事に、今更、感慨がある訳ではない。寧ろ今となつては、この身に誇りさえ持つていてる。

『誇りある悪』を伊達に名乗つてゐる訳ではない。

そんな不死の自分が長い年月をかけて、研鑽した知識、経験、技術の全てを以つて取り組んでいるのだ。それを否定する事は、エヴァ自身を否定している事に他ならない、そう思つてゐるのである。

そんな心の内を見透かすかの様に、彼は微笑みながら言った。

「ありがとうございます、エヴァ。この薬一つ飲む事にだつて、君の緻密な考
えがあつての事だと思います。解っていますよ。君がどんなに僕の
事を考えてくれてるかって。でも……僕も君も完璧ではありません。
僕がこちら側に足を踏み入れて僅か1年。その1年の間にどんな事
があつたか。僕も君も嫌と言うほど味わつたでしょう？」

忘れていませんよね？ そう言外に含みながら、続ける。

「どんなに緻密に考へても想定外、というのは必ずあります。エヴ
アを疑つていい訳じやないですよ？ でもその時に君の側に居ること
が出来なかつた、なんて事にはしたくないんです。どんな理由が在
るうとも。君と僕とでは研鑽してきた時間が違うから、僕が考えて
いる事なんて杞憂かもしけない。でもそれは理由にはなりません。
少なくとも僕にとっては」

エヴァはその瞳に確固たる意思を見た。やつぱり頑固だ、と思う。
こいつの口をしている間は絶対に譲らない、嫌というほど経験して
きている。

「……全く……お前と言つヤツは……」

首を振りながら嘆息する。

「僕が君と出会つて、決意してどんなセリフを言つたか」

まさか忘れちゃいました？ と言いたげに首を傾げる。それを聞い
たエヴァは、カアッと顔を赤らめた。

「バ、バカモノ！ それは今関係ないだろつーだ、大体、それと薬
を飲まない事に何の関係があるというのだ！」

がおー、という擬音語が聞こえてきそうな、可愛らしい怒り方に
彼は相好を崩したが、すぐに戻すと、

「関係？ あるに決まつてゐるじゃないですか。何時でも万全な状態の
時に災難がやってくるとは限らないって君のセリフでしょ？ こん
な状態の時にやつてきて、どうぞゆっくり治してください、その間、
そこら辺のカフェでブレイクタイム！ なんていう奇特で頭がお花畠
な敵がいたら、笑い死にます。モンティパインが、フランク・ド

レビン警部補並みです」

その言い回しに、頬を引きつかせながら、お前はホントに14才
かっ！と心の中で突つ込みを入れるエヴァであった。

「ゴホン、と咳払いをすると

「ま、まあお前が頑固なのは、今に始まつた事じゃないのは解つて
いる。薬は飲まなくていい！だが！しかつり怪我を治してから帰れ
！今すぐ帰るなど言語道断だつ！幸いにもココなら外との時間の流
れも違うし、週末もある。解つたな？」

これだけは譲らんぞ、とでも言いたげだ。

「そんなに心配しなくても大丈夫でしょう。幸いにも骨に異常もな
れそうだし、筋断裂を起こしている訳でもないし。傷もそんなに深
い訳でもないですよ」

理由は今さつき言つたし、以前自分が言つたセリフを反故にしち
ゃうの？と問いかける。

その問いに苦虫を噛み潰したかの様な顔になる。むー、と唸つて
いると、

「たまには、マスターの言つこと聞いてはどうでしようか？」

「ソウダゼ、タマーハイウコトキキヤガレ」

従者一人が口を揃えて援護してくれる。

「全く、みんな心配性なんだから。でも……ありがとう。うん、そ
うだね。たまには皆の言つ通りにするよ。じゃあ少し休ませてもら
つていいかな？エヴァ」

「当たり前だバカモノ。師匠の言つことは聞くものだ。行くぞ、茶
々丸」

「オレハモウスコシイルゼ」

「フン、好きにしろ」

エヴァは茶々丸と一緒に出て行こうとする。

「ありがとう、エヴァ、茶々丸。心配してくれて。」
彼はそう声を掛けた。

「いいえ、気にしないでください」

そう言つて茶々丸は律儀におじきをした。エヴァは何も言わずチラと横目で見ただけだった。

オレニハナニモナシカヨーと言つチャチャゼロに対し、弁解をする彼の声を耳の奥で聞きながら、エヴァは別荘を後にした。

3

別荘から出たエヴァは、ソファにビックリと座った。

ふー、と深いため息をつき、茶々丸にすぐにワインを持つて来るよつに伝えようとし、かぶりを振つてやめた。

「マスター、お食事の方はどうなさいますか?」

ワインとグラスを持ち、そう聞いてくる茶々丸。全く良く出来た従者だ、と思わずにはいられないエヴァだった。いや、違う。茶々丸は従者ではなく家族だ、と思い直す。

「ああ、今はいい。そうだな、2、3時間後でいい。」

「かしこまりました。お食事は2人分、重すぎずに少しスタミナが付く物でよろしいですか?」

その従者の答えにエヴァはフツ、と笑つた。全く良くな出来た妹だよ、お前は。そうポツリと漏らす。

「失礼ですが、マスター。私は人ではなくガイノイドです。マスターの親族ではなく従者です」

律儀に自らの在り方に答える従者に、

「いや、お前は既に私の大事な家族さ。それにヒトではないと言つのなら、私だつてヒトではないぞ?」

ニヤリ、と笑つてみせる。

「いいえ、マスターは純粹な人間ではありませんが、充分そのカテゴリーの中に入ると推察致します」

「ほつ、なぜそう思つ」

「他の動物と人間の間に、一つ大きな隔たりがあります」

続ける、と先を促す。

「最も大きな違いは、遊び、です。」

「なるほど。ホモ・ルーテンス、ホイジングだな」

「文化こそ遊びから生まれる、人間以外の他の動物が、文化と呼べる程の進化をしていないのは、遊び、がないからだと推察します」

ククツと喉を鳴らしたエヴァアは

「その定義から言つて、お前も立派なヒトだよ。お前が野良猫に餌を与えている、という行動は立派な遊び以外の何物でもないだろうよ。空間的分離を行い、境界を設け、その断片的空間内において、規則お設けているだらう?」

茶々丸は首を傾げる。

「お前が餌をやっている場所の100メートル先に別の野良猫がいたとして、その猫にわざわざ餌を届けてやるのか?」

茶々丸は首を横に振る。

「しかし、その猫が近くに寄ってきて、餌を欲しがつたらお前は追い払つたりしないだろ? その猫が先に居た猫を排しない限り。その猫たちは仲良く餌を食べる訳だ。そして食べきつて、猫たちは各自好きな時間を過ごすなりして、散っていくわけだ。」

茶々丸は黙つて聞いている。

「これを、そこら辺で遊んでるガキ共に置き換えてみろ。野球でも、サッカーでも、鬼ごっこでも、何でもいいさ」

暫く黙考した後

「何となく解ります」

「まあ、私の説明はかなり端折つて、的確では無かったかもしれませんがな。そういうことだよ。そういう意味で言えば、私達が今さつきやつてきた事も遊び、と言えるわけだが。」

「そうなのですか? と茶々丸は首をひねつた。

「まあ、悩んで考え、自分なりの納得する答えを見つける。お前は

まだ生まれたての赤ん坊と然程変わらんよ」

そう言つてエヴァは茶々丸が持つてきたワインをグラスに注いだ。

「そうだな、別荘から出でたら聞いて見たらどうだ?」

「海人様に……ですか?」

「ああ。あいつも中々、勉強しているみたいだからな」

クイックとワインを煽る。

「そういうえば、もう1年になるのですね。」

「フン、そうだな。落ち着かない1年ではあつたが」

ワインを飲み干し、不敵な笑みを浮かべる。

「その割には、楽しんで居られたように思います。」

そう言いながら、グラスにワインを注いでいく。

「そんなのは、ここ最近になつてからだ。まあ、退屈はしなかつたがな」

それきり、黙り込んで窓の外を見つめる。外はちょうど陽が沈みかけた頃合だつた。そう言えども、初めて出会つた時も、この位の時分ではなかつたか?

そうだ、ちょうど逢魔ヶ刻だつたな。

未だ、自分の別荘内でダウンしているであろう、駆出しの魔法使い生徒、重岡海人と出会つたのは。

エヴァはその時を思い出し思考の海に沈んでいった。

茶々丸はその主人を目にし、邪魔にならない様、静かに礼をして夕食の準備に取り掛かつた。

プロローグ（改）（後書き）

いかがでしたか？

短いプロローグの為判断が難しいと思いますが、アドバイス、感想などお待ちしております。

句読点、状況描写、難しいですね。

皆様の作品に比べると、力量不足を感じます。

これからも、頑張りますので宜しくお願いいいたします。

お読み頂いて有難うございました。

第1話　凡人は逢魔ヶ刻に大禍事に遭遇（前書き）

作者のダメ中年です。

第一話お届けです。

感想、アドバイス、お待ちしております。

では、どうぞ

第1話　凡人は逢魔ヶ刻に大禍事に出会う

全ての授業を終え、教室には数人の生徒しか残っていなかつた。

麻帆良学園男子中等部1年D組。

それが彼、重岡海人しげおかかいとがいる教室の名前である。

ここ麻帆良では小、中、高とエスカレーター式に上つて行く人間が殆どであり、他の土地から引っ越してきてこちらの学校に入学、編入する学生は極稀である。

そんな極稀な学生の一人が彼であつた。以前は東京の三鷹市に住んでおり、祖父母がこの麻帆良に住居を構えていた。

祖父母が事故で他界したのは海人が小学6年に成ったとほぼ同時にあつた、両親含め3人家族であつた重岡一家は家族会議の結果、祖父母の家に移り住もうと引っ越してきた。

幸いにも父の勤務先は、以前の住まいもここ麻帆良からでも、大幅な通勤時間の変更もない事から問題はなかつた。

両親の心配は息子の海人の事であつた。丁度多感な年齢に差し掛かるこの年代の時になるべくなら、転校は控えた方がいいだろう、中学校入学に合わせた方がいいのでは?と。

海人としては離れたくない事情が有つたわけでもないし、転校した所でそこそこには上手くやつしていく自信はあつたし、特に不安になる要素も見当たらない。

そんな理由から引越しに關しては問題はしていなかつたが、勘違いしたのは両親であつた。海人は小さな頃からあまり我侭を言わなかつた。きっと自分を押し殺しているのだろう、と。

海人にしてみれば、それってちゃんと息子を見てますか?と首を傾げたい所だ。

我侭を言わないのは単に言う必要が無かつただけであり、自分なりに要望を伝えてきたつもりだ。

まあ元々、物欲等は薄かつたし、何とか考えて工夫すれば、希望

する事柄の大体は叶つてきた。

海人としては誤解を解く必要も感じなかつたし、何かあつた時に我僕が通り易いだらうと思い、そのまま誤解したままでいてもらつてゐるが。

だが、海人が両親の心の内を知つていれば、きっとこう言つだらう。

逆に中学からの入学の方がきつたくないですか？と。環境がガラリと変わるわけだ。制服、校舎、教科。

只でさえ不安要素が有るのだから、当然顔見知りで固まるだらう。そんな不安要素一杯詰まつた、人間達が集まる中で完全イレギュラーな、見た事も無い奴の事なんかに気を回す人間が、そういう居るとは思えない。

ましてや麻帆良はエスカレーター式なのだ。自分以外みんな知り合い、なんて事の方が確立が高い。

そんな事情（勘違い）もあり、一家は海人の中学の入学に合わせて此方に引っ越しして來た。

そして、引っ越し終えた矢先の事だつた。急遽、父親の転勤が決まつたのは。

海人は思つた。何ですか、そのアメリカのコメディードラマ、ファミリータイズみたいなノリは。

まあ、両親はヒッピーでもないし、僕も共和党を支持している訳でもないし。

何と言つてもマイケル・J・フォックスに似ても似つかないですが、と。

エヴァがこの時ここにいたら、きっとこう言つだらう。だからつ！お前は本当に12才かっ！と。

結局、全ての手続きを終えた今。途方にくれる両親であつたが、海人は以外にも冷静であつた。

結局は此処か、父の転勤先の学校かどうかしかないのだ。このまま引きこもり、というのも有るには有るが。

そうなると、僕がヒッピー、逆ファミリー・タイズ？なんてバカな事を考えていた海人だった。

父に選択肢はない。家族がいる以上働くしかない。

ここで駄々こねて、上の機嫌を損ねるのも宜しくない。蹴つてもクビにはならないだろうが、左遷は有りえる。そんな事になつたらこれから先、どう考へても修正は容易ではない。左遷なんてさせんっ！つまらないこと言つてサー・セン！なんて口が裂けても言えない。

間違いなくクビがどぶ。

結局、家族会議の結果海人一人が残る事になつた。

これには猛反対された。当たり前だろう。彼は小学校を卒業したばかりなのだから。

海人は必死に考へた。彼だつて男の子なのだ。不安よりも好奇心の方が先に立つ。

何もかもが新しいのだ。土地、学校、生活。夜更かしで小言を言われる事も無い。門限がある訳でもない。色々な可能性が広がつているように思えた。だから彼は必死だつた。

だから説得した。

ここは言葉が通じない外国なんですか！無人島でもありません！電話だつて有るでしょう！

防犯だつてきちんとします！火の後始末は欠かしません！

大人ではないけれど、何も出来ない子供でもないでしょ！僕を信じてくれないのでですか……？と。

まくし立てるように矢継ぎ早に言葉を重ねる海人。

両親はこんなに必死な海人を見るのは初めてだつた。故に両親は思つた。

こうやつて段々、親離れして行くのか……？嬉しさと寂しさ、そして大きな心配。

色々な感情が混ざり合つた気持ちだつたが、結局は折れた両親だつた。

海人は、これで有る程度自由に出来ますね。いや、良かつた。二人共学生寮に気付かなくて。考える暇を与えて正解でした。と安心していた。

こうして、大いなる勘違いと、ほんの少しの腹黒精神で海人の一人暮らしが決定した。

因みに転勤先はアメリカであった。

そんな人もまばらな教室で、海人は何をやつているのかというと、書類の整理であった。

案の定、こここのクラスメートは海人以外皆、麻帆良出身であった。クラス担任は早く馴染んで貰いたいが為に、海人をクラス代表に選んだ。と言つても重大な責任を伴う様な役職ではない。精々、提出物等の収集、簡単な教師の頼まれ事等、雑務と言うかパシリと言うか……。

そんな役どころであった。今、整理しているのは簡単な進路希望調査である。

まだ早い氣もするが、この時期から学年全体で調査をする事によつて、それに合つた全体、又は個人の教育指導の指針に役立てる為に使うとか何とか、らしい。

海人も詳しく聞いて居なかつた。それもそうだろう。入学したてで、進路もへつたくれもない。高校生ならいざ知らず。こつちは、去年までランドセルだつたのだから。

ほぼ100%進学に決まつてゐるだろうに。

こんな事を言い出したのは、今年から学年主任になつた新田という教師らしい。どんな教師だつたか。

そうだ！人の3倍はカルシウムを摂取しないと、沸点が人並みにならない先生だ！

カルシウム・新田だ！両親は日本人どこの国の人間だ！と言わ

んばかりである。

そんな下らない事を考えながら、海人は書類を纏めた。後は職員室に持つて行くだけである。

1学年の男子クラス数は6クラスだ。海人はこの学年の代表生徒だ。男子だけではあるが。

女子は女子で別にいるらしい。それぞれのクラスで代表が一人ずつ。計6人プラス学年主任で学年代表を決めた。

やはり此処でも、海人以外は有る程度の顔見知りだつたらしい。歴史は繰り返す。中々決まらず、騒ぎが大きくなり始めた所で、カルシウム・新田が大噴火。

その場で彼が、一人輪に加わりきれていない海人を推薦。満場一致で可決。

これが学年主任になつて初めてのカルシウム・新田・ボルケーノ事件だつた。因みに名付けは海人。

そんな事を思い出しながら職員室に向かう。

各クラスの代表から自クラスの書類を受け取り、何日かに分けて提出してきた。今日が締め切り最終日になつていた。集まりが一番悪かつたのが自クラスというのが少し情けなく思う海人であつた。職員質のドアをノックし、失礼します、と入る。きょきょると室内を見回し件の教師を探す。

見つけはしたが、どうやら一人の女生徒と会話をしている。邪魔にならないように少し離れた所で待つていると新田の方が気付き声を掛けってきた。

「おお、重岡か。どうした？」

持つてきた書類を渡す。用件を済ませ帰ろうとする、

「そうだ、重岡。お前これから少し時間あるか？」
何でしじう？聞くと

「どうやらな、1人提出していない奴がいるんだ。女子なんだが」「一瞬、自分に不備があつたかと思ったが、女子なのでそれは無い」と結論づける。

先にいた生徒は、女子生徒の代表であり、報告してきたのだとか。只自分は、部活があるので処理出来ないらしい。先生たちの方もこれから職員会議があるらしく身動きが取れない。どうしようか、と思つていた所に海人が来たという訳だ。自分に取りにいってきて欲しいとの事だ。何でも今日中に揃えたいらしい。

予定がある訳ではないし、まあいいか、と請け負つた。

早速、依頼を果たすべく女子エリアに移動し校舎に入つていく。目的の教室を探していると後ろから声を掛けられた。

「ちよつとそこのアンタ！何やつてんのよつ！」

はい？と振り向くと、2人の女子生徒がこちらに向かつてくる。1人はツインテールでオッドアイ。もう1人は長い黒髪に二コニコと優しそうな生徒だつた。

何かしましたつけ？と首を傾げていると

「ここは女子校舎よ！何で男子生徒がいるのよ！」

ツインテールの子が鼻息を荒くしている。もう1人が宥めてはいるが。

海人は、ああ、なるほど、と納得し事情を説明する。説明を聞いた二人は納得した。優しそうな女の子は二コニコと

「そかそか、大変やな～」

ウンウン、と頷いている。ツインテールの子は少し気まずそうだった。突つかかつた事を気にしているらしい。

話していく内に、どうやら2人は目的のクラス生徒というのが分かつた。神楽坂と近衛、というらしい。

カルシウム・新田のぐだりで3人は笑つた。納得できるとの事。

海人は、提出不備の生徒の事は言わなかつた。告げ口の様な感じがして嫌だつたからだ。クラスの代表は、雪広というらしく、いんちょ、があだ名らしい。

ありがとう、とお礼を言い2人とは別れた。何でも近衛は部活、神楽坂はその付き添いとの事だつた。

海人も部活に誘われたが、考えておきます、と無難な返答をして

おいた。

図書館探検部。アドベンチャーな匂いがブンブンする部だった。さつさと目的を果たすべく教室へ急いだが、件の生徒は既に帰宅。仕方なく雪広という生徒を探し、事情を説明した。彼女は自分の不備を丁寧に詫び、新田教師に謝罪をしに行く、と言っていたが、自分から言つておくから大丈夫だと告げ、職員室へ戻った。入ろうとすると、丁度、会議に行く新田と鉢合わせ。

事の成り行きを報告すると、新田の顔は渋面になつた。余りにも眉間の皺が深く、困つている様子なので、海人は、差し出がましい様ですが、自分が彼女の家まで言つて回収しましょうか?と提案した。

「本当に申し訳ない。頼めるか?遅くなる様であれば、最悪、朝一になつても構わん。何か有つたら連絡してくれ」

そう言つて、携帯の番号を交換した。この埋め合わせは必ずするとも。住所を聞き件の生徒の家へ向かう。

住所を頼りに件の生徒宅に着いた頃には、既に日はとっぷり暮れていた。ログハウス調の、おしゃれな感じ。コテージやペンションと言つた方がいい様な造りの住まいだった。

チャイムを鳴らす。暫く待つていると

「どちら様ですか?」

耳の当たりにアンテナの様な物を付けた無表情の少女が出てきた。コスプレですか?と海人は思つたが、人の趣味はそれぞれ。口には出さなかつた。

「麻帆寮学園男子中等部学生代表1年D組みの重岡海人と申します。マクダウェルさんはご在宅でしょうか?」

長つたらしい自己紹介だと思いながら、丁寧にお辞儀をした。

「マスターにどの様なご用件ですか?」

僅かに警戒した様子に答える少女。

マスター?それつて何かの罰ゲーム?プレイ?何なんでしょう?

首を傾げながら事情を説明した。

暫く黙考し、少々、お待ちください、そう言つて戻つていつた。

もしかして、勘違いさせてしまったのかも、と思う海人だつた。まあ、親御さんが出てきても事情を説明すればいいか、と納得させた。暫くして、扉が開き中へ通される。案内されたりビングらしき部屋には1人の幼い少女が不敵な笑みを浮かべ座つていた。

「貴様は誰だ？何の用があつてここに来た？」

海人の第一印象、カワイイ子だなあ、と思つた。

「えーと、君がマクダウェルさんですか？」

海人は確認を取つた。

「だから、キサマは誰だと言つてはいる。勝手に人の家に来て、名乗りもしない。ふざけているとしか言い様がないな」

腕を組み、眉間に皺を寄せた。海人は、そつだつた、自己紹介が先だつたな、自分の失礼に反省した。

「ごめんなさい。麻帆寮学園男子中等部学年生徒代表1年D組みの重岡海人です。先程は失礼しました。改めまして、あなたがマクダウェルさんですか？」

自己紹介と共に丁寧に頭を下げる。

「ああ、そうだ。私がエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。中々素直じゃないか。キサマの謝罪に免じて、先程の失礼はなかつと事にしてやる」

尊大な態度でそう告げる。カワイイけど、偉そうな喋り方だなあと思う海人だつた。

「で、用件はなんだ？下らん事だつたら、すぐにほっぽり出すぞ」やつぱり偉そうだ、と思つたがそんな事はおくびにも出さない。海人は、ここに訪ねて来た用件を簡潔に述べた。エヴァはそれを聞くと、チツ、と舌打ちをし忌々しそうに、面倒くさいと呟いた。

「それは、今日で無くてはならんのか？」

「何度も、今日中に集めたいらしいです。最悪、朝一でも構わない、とカルシウム……じゃなかつた、えーと、新田先生は言つてました

が

海人の中では新田＝カルシウムになつてあり、直に新田の名前が出てこなかつた。

エヴァは方眉を上げ、

「何だそのカルシウムというのは」

怪訝な感じで聞いてきた。

海人はその経緯を話すと、エヴァは確かに理解できると笑つた。
「それにもしても、くそ真面目に見えて、それでもなさそうだな。キ
サマ」

ニヤリ、と笑う。

海人は首を傾げ、そうでもないですよ、とうそぶいた。

エヴァは、仕方ない、書いてきてやる、そう言つて立ち上がつた
が、それを止めたのは海人だつた。

自分のカバンから用紙を取り出した。此方に来る前に新田から、
貰つておいたのだ。

エヴァは僅かに目を見開き、ニヤリと笑つた。

「随分と用意がいいじゃないか。え？ 学年代表殿？」

嫌味とも賞賛とも取れない評価で、面白そうな顔で告げた。

「そうですか？ 学年でたつた一人だけ提出しない人ですからね。無
くしている可能性が高い、と思うのは飛躍した考え方ですか？」
につこり笑つて言った。こちらは明らかにイヤミであつた。その
物言いに舌打ちをし

「さつさと寄越せ。」

奪うように受け取ると、どっかりと座つた。そして、気付く。書
く物がないではないか、と。

再度、舌打ちをし、側にひかえる少女に持つてこさせよつとした
矢先に、目の前にペンが差し出された。

目で追うと、につこり笑つた海人がいた。明らかに自然な笑みで
はないそれを尻目に、これまた奪うようにペンを取り、書きなぐる
様に記入していく。

途中書き損じて、しまつたという顔のエヴァに再度新しい用紙が

差し出された。

また奪うように手を出すが、サツ、と避けられた。おちよくつているのかと激高しかけたが、海人は柔らかい笑みを浮かべ、「一度、深呼吸しませんか？時間はまだありますよ？ね？」

そう言つて冷静になる様促した。エヴァはその柔らかい笑みに、フツと笑い軽い深呼吸をした。

程なく書き終わり用紙を渡す。受け取った海人は、お疲れ様だと彼女を労つた。

用紙を受け取り、立ち上がった海人に、エヴァは声をかけた。

「用件はこれだけだな？」

と念をおした。頷く海人に、なら、さつさと帰るがいい、とやっぱり尊大な態度で帰宅を促した。

玄関まで見送られ、お邪魔しました、と言つたところで、エヴァの側に控えた少女が一步踏み出し、

「何も御もてなしもせずに申し訳ありません」

丁寧なお辞儀と共に謝罪をした。海人は、どうぞ、お構いなく、と会釈で返す。エヴァはフン、と鼻を鳴らしだけだった。

「逢魔ヶ刻はとっくに過ぎた。気を付けて帰ることだな」

エヴァは不敵な笑みで、意味深な事を言つた。

「逢魔ヶ刻と言うよりも、大禍事でした。」

そう言つて笑つた。エヴァは舌打ちを、その隣の少女は、すみません、と頭を下げた。

海人は迷つたが、最後にこれだけは言つておこうと口を開いた。

「あの、マクダウェルさん。人には色んな趣味があるので、言いづらいのですが……なるべくこういったプレイは、人にばれないようにした方がいいと思うんです。」

エヴァは、何言つてるんだ？コイツ、と首を傾げる。

「その、彼女はお手伝いさんなのかもしませんが、コスプレさせ、マスターと呼ばせ、その自分の優越感を満たすのはちょっとどうかと……」

申し訳なさそうに告げる。エヴァはその大いなる勘違いに
「違うわ！ボケ！勝手に変態にするな！茶々丸は、同じクラスメー
トだ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る。

「マスターと同じクラスの絡繆 茶々丸と申します。自己紹介が遅
れて申し訳ありません」

律儀に頭を下げる。

「あ、そうだつたんですが。すみません。大変な勘違いをしてしま
つて。マクダウェルさんも、ごめんんさい。変なプレイじやなかつ
たんですね」

と変態扱いした事を謝罪した。

「分かればいいのだ。分かれば。全く変な勘違いをしあつて」

エヴァは溜飲を下げた。だが、次の海人のセリフにまた怒鳴る。
「プレイじやなくて、邪氣眼ごっこだつたんですね。大丈夫ですよ。
そういう年頃しようし、僕にはそういう趣味はありませんが、理
解出来なくもないですよ。ええ」

やつぱり勘違いしていた海人だつた。

「アホかー！キサマわつ！何故私がそんな痛い人間にならなければ
ならんのだつ！」

またしても真っ赤になつて怒鳴り散らす。

ええ？違うんですか？と首を傾げる海人。

「違うわつ！ボケつ！何処をどう取つたら、そういう解釈になるの
だ！」

「ええ？でもクラスメートにマスターつて呼ばせるのつてそういう
事じやないんですか？」

「つるさい！キサマには、関係ない！用事が済んだのだから、せつ
さと帰れ！」

只のクラスメートではなく、ガイノイドにして従者である茶々丸。
だがエヴァとしては、何も知らない一般人に説明する必要もないし、
するべきではない。

海人も何か事情があるのだろうと思い、深く詮索しない方がいいと思った。

変に深く突っ込んで、嫌われてしまうの嫌だつた。

自分がカワライイと思つた女の子には誰だつて嫌悪感をもたれたくない。エヴァの姿にしても中1にしては、かなり幼い印象を持つたが、身体的な疾患を持っているのかもしれないし、それを指摘し、差別主義に取られる事は本意ではない。

たまたまカワライイと思つた子が、年齢の割には幼い姿をしていただけの事だ。怒らせてしまつた事に罪悪感を感じ、素直に謝罪した海人だつた。一応、許してはもらえたが。

そんなやり取りを終え、エヴァの家を後にしながら、新田に電話を掛ける。タイミングよく、会議が終わつたとの事で、届ける旨を伝えると、待つてるので気を付けて来なさいとの事だつた。

陽も沈み、宵の口である時間になつており、海人は一度振り返つた。エヴァ宅のきれいな外観がシルエットとして浮かび、僅かに顔を綻ばせ、さ、急いで届けようと早歩きし出した所で声を掛けられた。

「君、そこの家から出てきたね？ 一体何をしていたのかな？」

その人物は、スーツ姿でメガネを掛けた若い男性教師だつた。

何回か見かけた事のある、名前も覚えていない教師。後ろには生徒らしき人物が3人程いる。

セリフだけ取れば何てことないが、その口調には有無を言わせないモノがあつた。表情も硬く、海人は、何故か怒られている印象をもつた。

「はい。マクダウェルさんに用事がありまして。家にお邪魔をさせていただきました。」

具体的には言わない。自分の発言で、この件に関係ない教師に、彼女に対する心象を悪くさせない様、彼なりの配慮だつた。それを聞いた男性教師は

「だから、何をしていたのかを聞いているのだ！ さつさと答える！」

エヴァと同じ様な尊大な口調だが、海人は、この物言いに不快感を感じた。

「ですから、少々、用事がありまして。やましい事など何もやっていないですが？」

何故、自分が責められなければならないのか。海人は僅かに不機嫌になる。

「お前、以前には見た事がない生徒だな。何処から来た」

尋問のような口調に、ますます不機嫌になる。何故そんな事に答えればならないのか。今はそんな事関係ないだろに、と思った。

「中学からこちらに引っ越してきました。何か問題でも？それに自分が何処から来たのかなど、何の関係があるのですか？」

海人の口調もきつくなる。それを聞いた男性教師は、後ろにいる生徒に何やら聞いている。海人は、新田を待たせている事もあり、さつさとこの場を離れる事にした。

それに気付いた男性教師は、海人の前に立ちふさがり、

「まだ、お前は質問に答えてない！それから、お前ら2人は、奴の家に向かえ！何としてでも引っ張りだして來い。多少痛い目に合わせても構わん。今日は新月だ。奴も抵抗できんだろうよ」

嫌らしい笑みを浮かべながら、指示を出す教師。

海人は、何を言っているのか全く分からなかつた。引っ張り出す？痛い目？新月？脳みそが朦んでいる様にしか思えない。そこで思つた。

この教師は一生尊敬出来ないし、ここにいる生徒に対しても友達にはなれない、と。

そして、腹が立つた。何か良からぬ事をやろうとしているのでは？と。

「あなたは何を言つてゐるのですか？仮にも教師でしょう。自分の生徒に対して、奴だとか痛い目に合わせても、だとか。本当に教師ですか？この事は、学年主任の新田先生に報告します。教育委員会に訴えますよ」

そう言って、教師を避け立ち去るうとする。しかし、今度は1人の男子生徒が立ちふさがった。どうやら高校性らしい。

「お前は、そのまま抑えておけ」

男性教師はそう言い残し、残り2人を引き連れてエヴァ宅の方へ去つて言った。

「どいてください。」

睨みながら強い口調で言つ。男子生徒はニヤニヤしながら何も言わない。

埒があかないと判断した海人は、避けて素通りしようした。すれ違つた瞬間、いきなり殴られた。

海人はいきなり殴られ地面に転がつた。訳が分からなかつた。なんなんだ、一体！

起き上がり、見上げた男子生徒はやっぱりニヤニヤしていた。

「お前が悪いんだからな。逃げようとするから」

海人にとって、酷く耳障りな声だつた。やっぱり目上でも尊敬出来そうにない、そう思つた海人だつた。
彼の大禍事はまだ終わらない。

第1話　凡人は逢魔ヶ刻に大禍事に遭遇（後書き）

いかがでしたでしょうか?
これからも頑張ります。
宜しくお願いいたします。

第2話　凡人は大禍事後に魔法と出会い（前書き）

作者のダメ中年です。

第2話お届けです。

駄文です。

今回ダメダメです。

自分なりに頑張ったんですが……。どうしてこうなったのか。

最早、プロット関係なし。こんな主人公じゃなかつた筈なんですが。

もう、いいです。このまま突っ走りてしまえ！

では、どうぞ。

第2話 凡人は大禍事後に魔法と出会い

殴られた海人は、混乱した。いきなり殴られるような謂ではないし、自分が悪いとも思わない。

殴られた箇所はジンジンと痛み、口を拭うと拭った手に血が付着し、鋭い痛みが襲つた。

混乱覚めやらぬ中でも、何とか落ち着いて、深呼吸をする。喧嘩の経験は数える程しかない。

海人は思案した。先ずは落ち着いて、この状況をどう打破するか。辺りに助けを求められる人はいない。

どうする？携帯を使うか？いや、ダメだ。携帯を取り上げられたら終わる。

立ち向かうか？いや、恐らく負ける。向こうは高校生。身体的スペックが違う。

逃げる。それが最善。でもどうやって？普通に逃げても追いつかれる。追いつかれない状況を作るには？

そう思案していると、ゆっくりとその男子生徒は近づいてきた。

「ほら、さつさと立てよ」

そう言いながら足先で小突いてくる。

海人は、その仕打ちに腹が立つた。あまりにもバカにしそぎではないか。自分が一体何をした？

「どうした？ビビッて動けねえか？だせえ」

「僕が何をしたって言うんですか！」

男子生徒は睨みながら、

「ああ？手前えには関係ねえよ。何も知らねえガキは引っ込んでろ！大体逃げようとするから悪いんだよ！」

関係ないのに殴られた？引っ込んでろ？逃げようとするから悪い？相手の物言いにカツとなつた。さっきまで逃げる事を考えていたが、その考えはすっ飛んだ。

よし、いいでしょ。理不尽な暴力を振るつた相手には相応の報いをしなければ。海人の決断は早かつた。

海人は、どちらかといえば平和主義者だが、理不尽に暴力を振るわれて、黙つている程お人好しではない。

無駄な争いは好きではないがヘタレでも腰抜けでも無かつた。そうと決まれば反撃だ。相手は油断している。ビビッて動けないと思い込んでいる、反撃は無いとタ力をくくつっている。

そうと決まれば、このまま油断させておくのが吉。

タイミングを見計らい、隙を突いて一気に置み掛けるが重置。そう判断した海人の行動は早かつた。

下に俯き鼻を鳴らし、目元を拭う。泣いている振りをしながら、ゆっくり立ち上がるうとする。

相手の失笑が聞こえた瞬間、緩慢な動作から俊敏な動作に移した。小突いていた相手の足首を、両手で掴み、立ち上がりながら持ち上げる。虚を付かれた相手はぐらついた。

すかさず片方の足に足払いをする。見事に倒れた相手は背中と後頭部を打ち悶絶した。

間髪いれず、相手の鳩尾目掛け足を振り下ろす。体重の乗つた踏み込みがヒットした。

お腹を押さえまたもや悶絶している相手に、今度は顔面目掛け足を振り下ろす。パッと鼻血が舞つた。

止めどばかりに、おもいきり相手の顎目掛けでトゥーキック。流れるような一連の動きであった。

頸とまたもや後頭部を強かに打ちつけられた相手はぐつたりとなつた。それを見た海人は肝を冷やした。

まさか、死んでいないですよね。どうやら息はしている様だ。ほつと息をつく。

カツとなつてやつてしまつた。反省も、後悔もしていない。ちょっとやりすぎた感は否めないが。

正当防衛の範疇ですよね。うん。そう結論付けた。

さて、どうしましようか。まず、報告しなくては。携帯を取り出しど話を掛けた。すぐに新田に繋がった。

経緯を報告する。新田はかなり吃驚していた。男性教師の姿を伝えると、休みを取つている教師との事だった。

自分はマクダウェルさんの家に行きます、と述べ返事を聽かずに切つた。

返事を聽かなかつたのは止められると思つたからだ。海人には行かなければならぬ、漠然とそういう想いがあつた。

何故だか分からぬ。何かもやもやするので。

その後すぐに匿名で救急車を呼び、氣絶している彼を回収して貰うよう依頼した。

そしてエヴァの家に足を進めた。

急いで駆けつけると、そこには不穏な空気が渦巻いていた。

家の前でエヴァと茶々丸に対し先程の教師含めた3人が対峙していた。それはいい。

だが、おかしい。明らかにおかしい。

何故、この教師はナイフとモデルガンを持っている？

何故その男子生徒も同じナイフを持つて構えている？

隣にいる女子生徒が持つてているその大きな杖みたいな物は何ですか？

それに対し、腕を組み悠然と佇み不敵な笑みを浮かべるエヴァ。

その隣で、何やら構えている茶々丸。

海人はこの状況に着いて行けなかつたが、突如閃いた。

ヒントは有つたじゃないですか。強く否定していたが、そういう事なんですね。しかし、さつきのもやは何だつたんでしょう……？ま、まさか！そんな！僕にそんな願望が有つたなんて！

認めなくてはいけないのでしょうか……？否！断じて否！…これだけは認める訳にはいきません。

ですが、ここにいる人たちの事は否定してはいけませんよね。ならば、自分は暖かく見守りながら事態の收拾に力を注ぐとしましょ

う。

新田先生にも報告してしまったことですね。新田先生が知つたら、ボルケーノ処じや済まないでしょ。

しかし、教師が休んでまでやる事ではないでしょに。全く。すばやい思考の後、海人は意を決して一步を踏み出した。

「マクダウェルさん！」

その一言に一斉に5人は海人に目を向けた。

エヴァと男性教師は目を見開き、生徒2人は困惑した。変わらないのは茶々丸だけだつた。

予想外な人物の登場により、一同は困惑した。一番立ち直りが早かつたのは、声を掛けられたエヴァだつた。

「キサマ、どうして此処に戻ってきた！帰つたんじゃなかつたのか！」

あまりの剣幕に辟易していると、

「お前が何故ここに来る！安田はどうした！」

男性教師は眉根を吊り上げ激高した。

ああ、あの人安田って言うんですか。知りませんでした。当たり前ですけどね。

氣絶させました、とは言えず、どう誤魔化そつかと思案する。上手い誤魔化しが思い浮かばなかつたので、事実のみを告げる。

「救急車で、病院に搬送されました。僕は事態を收拾する為に此処にきました。既に他の教師にも連絡済みです」

確かに事実しか言つてない。そのセリフにそれぞれが困惑した。

2人の生徒は、病院に搬送のくだけ、何が有つた！と。

エヴァは、事態の收拾のくだけ、お前一般生徒じやなかつたのか！と。

男性教師は、他の教師への連絡というくだけ、余計な事を！と。

海人は、つけいる隙を与えないように一気によくし立てた。

「マクダウェルさん、先程の件ですが、勘違いではないじゃないですか。恥ずかしがらなくてもいいんです。僕はあなたの味方になり

ます。言つてくれれば時間さえ合えば幾らでも付き合いますからね？先生まで巻き込むのは流石にやりすぎです。それからそこのお二人、先輩なんですから、後輩に対してもちゃんとアドバイスしなくちゃダメじやないですか？付き合つて上げる事は後輩想いだとは思いますが、優しいだけでは駄目です。時には厳しさも必要です。特に僕達ぐらいからの年代は。それから先生。あなたは何をやつてるんです？先程も言いましたが、仮にも教師でしょ？仕事を休んでまでやる事ではないはずです。給料泥棒などと後ろ指差されても知りませんからね。指導もちゃんとやってください。いきなり殴りかかってきましたよ。全く。もう少しで連絡した教師が来ると思いません。しっかり弁解してください。皆さん、いいですね」

「ここで、ふー、と息を付く。自分が1人の生徒を伸した事を棚に上げて、堂々と言い放つた。

勘違いここに極れり。

茶々丸以外の4人は口をあんぐりと開けた。

皆思うことは一緒だった。お前は一体何の話をしているんだ！と。「キサマは、何を勘違いしている！全く意味が解らんぞ！」

またしても一番立ち直りが早かつたエヴァが声を荒げる。

海人は、あれ？何か間違つてました？と言わんばかりに首を傾げる。

「お前、一体誰に連絡したんだ！言え！どうして休んでいる事を知つている！」

慌てた男性教師も声を荒げた。

「そんなの決まっているじやないですか。学年主任の新田先生です！」

自信満々に言つ。んなあ！異口同音に言葉を発する。茶々丸は変わらなかつたが。

男性教師は思案した。新田と言うのが少々厄介だが、まあいい。所詮は一般人。

そもそもの目的はエヴァンジョンの排除に伴う自分の名声上昇

と懸賞金。問題はない。

イレギュラーが舞い込んだが、何の力もない一般生徒。計画に変更はない。

新田が来る前に全員殺してしまえばいい。イレギュラーはエヴァンジヨリンが殺した事にすればいい。

そう結論付ける。だが彼は欲に目がくらんで気付いていない。

新田に知れた時点で一般、魔法に關係なく全ての教師陣に話が回っている事を。

既にこの件に関しては詰んでいる事を。

「まあ、新田なんぞどうでもいい。おい、お前らせつやと片を付けるぞ。」

指示を出しながら、自分も構える。再び不穏な空気が流れ始めた。これに慌てたのは海人だつた。上手く収集できたと思った矢先の事だつたので困惑した。

まだ続けるの？この邪氣眼ごっこ。未だに勘違いが解けていない海人は男性教師に声を掛けた。

「ちょ、ちょっと先生。待ってください。こんな事している場合ではないでしょ！」

男性教師は、煩わしそうに銃口を海人に向けた。

「お前は邪魔だ。取りあえず死んでろ」

その事にいち早く反応したエヴァアは、茶々丸！と一言掛け、自分は魔法薬を取り出す。

茶々丸は海人の襟首を引っ張り、力任せに射線から移動させる。瞬間、海人の頭が有つた所には、銃声と共に放たれた弾丸が通過した。

引き倒された海人は激しく混乱した。

え？なに？なに？今の？本物っぽくないですか？っていうか本物なんですか？どういう事？

ここに来て、漸く自分がとんでもない勘違いをしているのではないかと思い至る。

心臓が早鐘の様に打ち、喉がカラカラに渴いていく。一瞬にして極度の緊張状態に陥る。

呼吸は荒くなり、手が震えだす。

「バカモノが！ ぼうつとしてないで、さっさと逃げろ！ 茶々丸、教師の方は任せた！」

エヴァに声を掛けられた。 そうだ逃げなくては…殺されそうになつたのだ。 早く逃げなくては！

急いで立ち上がり駆け出す。 少しした所ではた、と氣付く。
1人で？ 2人を置いて？ 女の子を置いて逃げ出す？ 冗談じゃない！ それだけはやつてはいけない！

重岡海人はそこまでチキンじゃない！ 殺されそうになつたとしても！

両親に、何も出来ない子供でもない、と言い切ったのは自分じゃないか！ そう思い自分を奮い立たせる。

振り返ると海人に取つて有りえない物が飛び込んできた。
何ですか！ 何なのですか！ アレは！ 有りない！

あれではまるで…… そう、魔法みたいじゃないですか……！

氷の矢が飛び交い、炎が舞う。 御伽噺やゲームの世界。 ファンタジーな出来事に眩暈を覚える。

僅かに瞠目し、頭を振る。 そんなのは後だ。 今は、自分だけが出来る成すべき事を。 海人は深呼吸をした。

どうやら皆は、自分に気付いていない様だ。 逃げたと思つてている。 焦るな。 觀察しろ。

ゆっくりと移動する。

見ているどどづやら、あの摩訶不思議な現象には呪文が必要なようだ。

あの男性教師は絡繳さんに翻弄されている。 マクダウェルさんは、男子生徒と女子生徒を相手にしている。

不思議現象を使いたいが男子生徒に接近され、途中で断念。

男子生徒に接近を挑むも、女子生徒の不思議現象に攻め切れないのである。

よし。自分のターゲットはあの女子生徒。自分に一番近い位置で、杖しか持っていない。

彼女を無効化しつつ、他の人間の動搖を誘うがベスト。

どうやって無効化と動搖を誘う？手元に武器はなし。近くにも武器になりそうな物もなし。

時間はあまりない。誰かに気付かれた時点でアウト。

まずはあの杖を取り上げるのが先か？呪文を中断させるのが先か？同時にには？

口を塞ぐ？無理。背後に回り込む余裕はない。

体当たりでもするか？リスクが高い。失敗したら確実に反撃される。

先に動搖を誘うか？いや、違う。時間がベストだが、優先すべきは彼女の方だ。

どうする？どうすればいい？考えろ！－考えろ！－思考を停止させるな！

逸る気持ちを抑え思考の海に沈んでいく。

瞬間、閃いた。これなら多分イケル。しかし！それは許されるのか？

ある意味、暴行、殺人よりも不味くないか？仕方ない。後で土下座しよう。許してくれるはず。多分。

数瞬の内覚悟を決める。そうと決まれば、後はタイミングのみ。彼女が呪文を唱え始めたら、即行動。

行きます！N o b o d y c a n s t o p m e ! !

コメディー映画、緑の仮面を手に入れた数奇な男の運命のセリフをリスペクトする海人。

体勢を低くしながら、現状、考えうるベストなポジションに付く。後は待つのみ。

そして、その瞬間は程なく訪れた。

その女子生徒は詠唱を開始した。海人の位置からは丁度、死角になっている。

海人は、好機！とばかりに飛び出した。ダッシュをしながら、後、数歩の所で声を上げる。

「ごめんなさい！」

その女子生徒は反射的に海人の方に目を向ける。海人は心の中でもう一度謝罪した。

そして、徐に彼女のスカートを捲り、あまつさえ、胸に手を当てその女子生徒の胸を揉んだのである。

「キヤーー！」

悲鳴を上げ、詠唱は中断。胸を隠しスカートを抑える。同時に杖を落とした。

それを見た海人は素早く杖を拾いバックステップ。

その光景に茶々丸含め、啞然。何とも間抜けな作戦ではあったが効果はあつた様だ。

ベストではないが、現状、海人の実力ではこれが精一杯だろう。

海人は間髪いれずに

「絡繆さん！マクダウェルさん！」

と声を掛けた。

いち早く復帰した2人は、まだ立ち直っていないそれぞれの相手に強烈な一撃を入れ沈めた。

残った女子生徒は、オロオロし始めた。それもそうだろう拮抗していた状態が、一瞬の内にこの様な状態に為つてしまつたのだから。元々この件に関しては、乗り気ではなかつた。なら、何故参加したのか？

それは、少し好意を寄せていた男子生徒に誘われたからだつた。一緒に悪を排除しよう。お前がいれば心強い。終わつたらデートしようぜ！と。この誘いに落ちた。

そういつた経緯でこの場に居合させたのだ。

好意を寄せていた彼は病院に搬送されたらしいし、知らない下級生にスカートを捲られた挙句に、胸まで揉まれたのだ。

そして急に四面楚歌の状態。何が何だか解らなくなつて、ついに

は泣き出した。

泣き出した彼女を拘束しだす茶々丸。

海人はその様子に、あちゃーと頭を抱えた。えーと、どうしましょう？ やっぱり土下座ですよね。

しかし、まさか泣かれるとは……。これは流石に想定外です。

そんな事を考えていると、エヴァがつかつかと寄ってきて

「キサマは！ 一体！ 何を！ やつとるんだー！ アホか？ アホなのか？ 逃げたと思ったら、戻つて来ていきなりセクハラ！ ほんつとに訳分からんわ！」

かなりお怒りのようだ。しかし、海人は冷静に

「仕方ないじゃないですか。マクダウェルさん達残して逃げるのは嫌だつたし。かと言つて、僕には不思議現象なんて起こせないし。この状況で自分が出来る最善を考えた結果がアレなんですよ？ 現に上手くいつたじゃないですか。それに、言つてはなんですが、あんな事好きでやつたわけじゃないんです」

その物言いにエヴァは気が付いた。

そうだった。コイツは一般生徒だ、と。

この後の処理をどうするか考えていると、銃声と共に海人に押し倒された。

何が起こつた！ エヴァは海人を見た。瞬間理解する。海人は自分を庇つたのだ。

何たる不覚！ この闇の福音ともあろつ自分がこんな下らない失態を犯すとは！

茶々丸に指示を出すよりも早く、件の原因の教師は吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばした人間を見て、僅かに警戒を解く。そして海人に目を移した瞬間固まつた。

海人が肩を抑えながら、声にならない悲鳴を上げていた。顔は真っ青で、目をギュッと瞑り、小刻みに震えている。

エヴァは慌てて声を掛けた。

「おい！大丈夫か！しつかりしろ！」

海人は返事が出来なかつた。経験のない未曾有の激痛に、パニックになつてゐた。思考が定まらない。

痛い！痛い！痛い！肩が焼ける様に痛い！それしか考えられなかつた。

「タカミチ！生徒が撃たれた！治療できる奴を早く連れて来い！モタモタするな！」

怒鳴り散らす様に大声を上げる。

タカミチと言われた男は、慌てて1人の女性教師を伴い駆けつけてくる。

海人は何が何だか解らないまま、その女性教師のされるがままに治療を受けた。

未だ思考が定まらない。何だか夢の中にいるみたいだ。

でもこの激しい痛みは、リアルを容赦なく突きつけてくる。

痛みが段々引いていき、完全に収まつた所で、漸くまともな思考が出来るようになつっていた。

ふと辺りを見回すと、そこにいる殆どが自分に目を向けていた。

何か言わなくては、と思つた所でエヴァから声が掛かつた。

「大丈夫か？」

立つた一言。だがその一言は、彼が今日聞いた彼女の声の中で一番優しい声音だつた。

何故だか安心できた。コクと頷く。

「落ち着いた処でいいかい？えーと、重岡君と言つたつけ。大丈夫そうなら、このままちょっと学園長室まで着いて来てくれるかな？ああ無理にとは言わないよ？どうだい？」

そう声を掛けってきたのはタカミチと呼ばれた人物だつた。

悪い人物ではなさそうですが……何か釈然としないんですよね。こんな怪我した後なのに。治つたからいいとでも思つてるのでしょうか。それが彼に対する第一印象だつた。

こんな事があつた今、海人は軽い人間不信に陥つていた。

教師が生徒を、躊躇なく殺そうとしてきたのだ。普通なら考えられない。あの不思議現象の事もある。

こんな教師をのさばらせておく学園にも不信感が募る。その学園の長。きっと会え、ということなんだろう。

海人は、深呼吸をした。自分を落ち着かせた。大丈夫。不思議現象でもう痛みはない。

冷静にならなくては。何度も深呼吸を繰り返す。よし、大丈夫。さて、このまま着いて行くのが吉か？それとも体調不良を理由に辞退するのが吉か？

行く？取つて食われる事はないと想いますが……。

この事の説明だけなのでしょうか？自分以外、然程驚いている様子もないです。

ということは、仕組まれていた？有りえないですね。自分の行動は予測が付かなかつたはずでしょ。

となると……ここで説明がないというのは、最終的な決定権は学園長にありますね。だとすれば、学園長は間違いなく、この事の関係者でしょう。

首謀者という事もあります。しかし情報が少なすぎます。何をするのか、されるのかが検討が付きません。脚下です。

辞退した場合は？恐らく明日には呼び出されますね。考える時間は増えますが、1人暮らしですし。

仮に学園長が首謀者だった場合、これは非常に危険ですよね。自分の事など簡単に調べられるでしょうし。家に居るは下作。

満喫などはどうでしょう？自分の年齢では無理ですね。追い出されます。

警察に保護……？駄目です。信じてくれないでしょ。撃たれたといつても、あの不思議現象で傷がありません。

困りました。どちらを取つてもジリ貧です。

最善は、必要な情報を取得しつつ時間を稼ぐ、ですね。恐らく情報収集時間は……今の時間からすると1時間が限度。

僅かな時間で情報収集をするには……？やつぱり人に聞くのが一番でしょう。しかし、自分が信用できる人物でないと……そうなると……。うん。この線でいきましょう。考えを纏めると海人は口を開いた。

「え、えーと、ちょ、ちょっと、その色々ありすぎて……。少しだけ、あの、その、休ませてくれませんか？何かちょっとだるい様な感じというか……。す、すみません。ダ、ダメですか？」

オドオドして言い出した。

その時にチラッとエヴァを盗み見るよう見た。一瞬だがエヴァと目が合った気がした。

「うーん、どうか。じゃ明日にするかい？体調もよくなさそうだし

ね。」

そう言つて微笑んだ。

いえ、少し休めば大丈夫です。といしながら、俯きながらエヴァを盗み見た。エヴァは薄く笑っていた。

「タカミチ、少し休めば大丈夫だと言つてるだろ。まあ、コイツには助けられた恩もある。ウチで少し休ませてやる。少ししたら一緒に行つてやるよ」

「そうかい？じゃ、頼むよエヴァ。じゃまた後でね重岡君」

そう言つて他の人間を引き連れて去つて行つた。

海人がほつとしているところ、エヴァが、早く来い！と促した。

海人は、取りあえず第一関門は突破しましたね、と胸をなでおろした。

リビングに通されると、エヴァはどっかりと座り、海人にも座るように促し、茶々丸に茶の用意をさせた。

エヴァは優雅に足を組み見定めるような視線を送つた。

「で？少しばかり着いたか？学年代表殿？」

おどけたように言つた。

「ええ。もちろん。」

「言いたい事は山ほどあるが、先ずは礼を述べておこう。助かった。」

礼を言う。しかし、お前も悪いのだぞ？のこのこ戻つて来たのだから。責任の半分はお前にあるのは分かつてゐるな？」

ギロリ、と睨みつける。

海人は苦笑し、ええ。もちろん、と自らの非を認めた。
「で？聞きたい事があるんだろう？答える範囲で教えてやる。
感謝しろよ？これで、貸し借りな無しだ。いいな？」

有無を言わさない口調だつた。

海人は思った。態度も口調も尊大だけど、何故か不快感がわからぬ、と。

さて、情報収集を始めるとしますか。時間は有限。ここから第二関門ですね、と。

先ず、海人は先ほどの不思議現象について聞いた。ほぼ予想通りの答え。

それを踏まえた上で、質問していく。エヴァはそれに答えられる範囲で返答していくた。

きつかり1時間を費やし、エヴァ宅を後にした。
エヴァ、茶々丸の3人で学園長室へ向かう。エヴァはこの道のりの間、終始笑みを浮かべていた。

程なく学園長室に着く。エヴァは目線でいいか、と促す。
海人は軽く深呼吸する。ここから、最終関門。さて、気合入れていきましょうかね。

力強く頷きエヴァと共に入つて行く。

室内には、学園長をはじめ、タカミチと呼ばれた教師、他、数人の教師が待つてゐた。

先ず最初に声を掛けたのはタカミチだつた。

「やあ、体調はもう大丈夫かい？」

そう言って座るように促した。

失礼します、と挨拶をし座る。

エヴァに聞いた人物像通りの人間達がいた。予想通りの展開だつた。

「重岡君、災難だったのう。でももう大丈夫じゃ。何も心配いらんわい。」

好々爺然とした表情で語りかける学園長。

海人は、おどおどした態度で、重岡海人です、と会釈をする。

「早速じゃが、いいかの？」

海人は小さく頷いた。

「今日の事は、既に高畠君から報告を受けてある。重岡君は、エヴァから何か聞いたかの？」

いいえ、それ処ではなかつたです。と小さく返した。

その後の魔法関連の説明はエヴァと殆ど同じであった。

「大体の事は理解できたかの？」

はあ、と生返事を返す。

「それでじやのう。本来ならば何も知らない一般人には忘れてもらうのが常なんじやよ。しかし、聞くところによると、魔法生徒を2人も倒していくそつじやないか。誰にでも出来る事ではないぞい。その素質を活かして、麻帆良に住んでいる人達の為に役立ててみてはくれんかのう。この通りじや。力を貸しておくれ」

そう言つて学園長は頭を下げた。

何人かの教師は、学園長に反対する。

彼はまだ子供です！とか、態々必要ないでしょ？一体誰が指導するのですか？などなど。

学園長が諫めて答えを聞いてくる。

海人の出した結論に学園長は瞠目した。

海人は一言、強い意志を込めてこう言つた。

記憶を改竄して下さい。と

第2話　凡人は大禍事後に魔法と出会つ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ええ、作者一番解つてます。

感想、アドバイス、暇だつたらお願ひします。

次回、ガンバリマス。

お読み頂き有難うございました。

第3話 凡人は魔法を忘れ再び魔法に出会い（前書き）

作者の、ダメ中年です。

皆様にお詫び申し上げます。

タイトルに語弊あります。

主人公、凡人じゃねえ。どうしてこうなった！

主人公、作者の手を離れました。とまらねえ。はい。

こんなキャラじゃなかつたんです。最初。

もうどうなるか作者にも予測がつきません。

それでも暖かく見守ってください。

では、どうぞ。

第3話 凡人は魔法を忘れ再び魔法に出会い

海人の朝は以外と早い。この年で1人暮らしをしている人間は少數だろう。

その少数の中でも規則正しい生活を心掛け、尚且つ実行している者など皆無に近い。

海人は、6時半には起床する。朝シャン、朝食を済ませ、火元の確認。

アメリカにいる両親へ登校前に電話をして家をでる。
毎朝の電話はこの生活をする為のルールに一つだった。
面倒くさい、とは思うが仕方ないと割り切っている。
この年で1人暮らしを許されているのだ。これぐらいは当然だろう。

今日も同じサイクルで戸締りをし、家を出る。

海人は空を見上げた。

うん。今日も快晴。いい一日になるといいですね。
海人は何事にも余裕を持つて行動するタイプだった。
家を出るのも少し早め。校舎までの道のりを、ゆっくりゆっくり歩いて行くのが日課だった。

その日1日をどう過ごすか。登校しながら考えを巡らすのが気に入っていた。

しかし……この手紙一体何なんでしょう？

今朝、郵便受けに入っていた奇妙な手紙を取り出す。
どこかの住所が書いてあり、その下に『本日18時、上記住所にて待つ、他言無用』

たったそれだけしか記載されてない手紙。

差出人の名前も無し。宛名は確かに自分。

今時、果たし状でしょうか？誰かに恨みを買う様な事しましたつけ？

それとも告白でしようか？いやあ、モテル男はつらいですねえ。文面的には、果たし状気味。しかし自宅のポストだ。直接乗り込むか、直接呼び出した方が効率的。

だが、告白にしては、かなり硬い文章だ。

海人は思案した。なるほど、と手を打つ。

きっと、ものすごくシャイなんですね。かなり初心な子なんでしょう。どんな子なんでしょうか。

楽しみです。一人暮らしで良かつた。父さん、母さん、重岡海人は今日、大人の階段を一段上るようです。

海人の中では既に告白という事になっていた。

果たし状だと思って1日憂鬱な気分で過ごすより、告白を想像しながら過ごす1日の方が、精神衛生状遙かにいい。

最悪の事を考え、多少の武装をして行きましょう。そう結論付けた。

海人には無視するという考えは、微塵もなかつた。

しかし、客観的に見れば、海人の考えはただの妄想にしか思えない。

それでも、武装していく強かさは持っているが。

それでも海人に取っては刺激的な1日になる事は間違いないだろう。いい、悪いは別にして。

面白い1日に成りそうだと思う海人だつた。

学校の授業も滞りなく終わり、寄り道せずに帰つて家に着いたのは、夕方だつた。

シャワーを浴び、小奇麗な服にそでを通して、いざ出陣！と竹刀袋を持つ。

何故か家にある木刀を持ち意氣揚々と家を後にする。

何でも、父親は昔に剣道をしていた事があつたらしい。興味がないので詳しく聞いてはいないが。

そうだ、ケーキでも買っていきましょう。しかし、何人家族なのでしょうか？

多分」「自宅ですね。適当に買って行きましょう。

途中でケーキを買い、件の住所に着いたのは、指定の15分前だつた。

いや、何ともお洒落なお家じゃないですか。ペンションみたいですね。

ちょっと早すぎでしょうか？がつついでいる様に思われるのも何ですし、少し時間を潰しましょうか？

そう思案していると、玄関が開いた。

中から、茶々丸とエヴァが出てきた。
どちらが、手紙をくれたんでしょうか？うん。金髪の子だったら、嬉しいですね。

海人はどぎまぎし、パツと姿勢を直し挨拶した。

「初めまして。麻帆良学園中等部1年D組みの重岡海人と申します。本日はお招き頂き有難うございます」

笑みを浮かべ挨拶する。その挨拶にエヴァは喉をククッと鳴らせる
「ああ、知っているとも。何せ一週間ぶりだからな。学年代表殿？」
ニヤリと笑った。

はて？一週間ぶり？初対面ですよねえ？それとも、自分を前から見つめていたんでしょうか？

海人のエヴァに対する第2印象はカワイイけど、何か変わってるなあ、だった。

件の事件から1週間がたつていた。

リビングへ通された海人は困惑していた。

まあ、座れ、と促されて座る。

「やっぱり、良く分からん奴だなお前は。洒落た格好に竹刀袋とケイキ？」

エヴァは首を傾げている？

海人は取りあえずケーキを差し出した。エヴァは怪訝な顔になりながらも受け取った。

海人は先ず、用件を聞こうと思つた。

心の準備はOK！僕は、どんな告白も受け止めて見せます。ドンと来い！

「この手紙をくれたのは、君でいいんでしょうか？」

気合を入れて聞く海人。エヴァはその気迫に押されながらも、「あ、ああ、誰にもこの事は言つてないな？」

と念を押す。ええ、もちろん、と返す。

僕は、空気が読める男なんですよ！

そんなに恥ずかしながら大丈夫ですよ？想像どおりシャイな子だなあ、と思つた。

「先ず確認をさせる。キサマは一週間前、新田に収集した進路調査表を提出したな？その時何か依頼されたらう？その後キサマはどういう行動を取つた？」

意地の悪い笑みを浮かべ聞いて来る。海人は予想外の問いに必死に記憶の糸を手繰り寄せた。

「えーと、1人分の書類不備の処理を頼まれて……でもその子はいなくて……それを報告しに行つた矢先に……確か……そうだ高畠教師が、その子の書類を持ってたんでした。」

「で、お前はそのまま帰宅した。そうだな？」

海人は思い出しながら、ええそうです、と相槌をうつた。

それを聞いたエヴァは、大きく笑つた。

海人には、訳が分からなかつた。自分の行動に笑う要素などないはずだ。

ひとしきり大笑いをしたエヴァは、

「全く、大した奴だよ！お前は。今までの経緯を全てジジイが聞いたら何としても、お前を学園側に引っ張ろうとするだらうよ。

お前は自分で凡人と言つたな？ああ、そうだ。お前は確かに凡人だよ。

血筋、容姿、魔力量、気の多さ、全く以つて凡人だ。だが、一つだけ誇つていい！

お前のその最善を導き出す思考力は正に秀逸だ。この、闇の福音

が保証してやる！喜べ！」

そう言つてまた笑い出す。海人はさうに困惑した。何を言つてゐるのか解らない。

「ああそう言えば、今のお前には自己紹介が、まだだつたな。エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ！宜しく、学年代表殿？」ニヤリと笑つて自己紹介をした。

「フン、では本題に入ろうか。先ずは黙つて聞いておけ。」告白じゃなさそうですねえ、と思つた海人だつた。

言外に、口は出すなよ？と匂わせる。その有無を言わせない口調に、首肯する事で同意する。

エヴァはその日の出来事を淡々と述べていく。

聞き終える頃には出されたお茶がすっかり冷え切つていた。聞き終えた海人は、目を瞑り黙考する。たっぷり時間を掛け内容を整理して行く。

目を開きエヴァを見据え口を開いた。疑問があります、と。言つてみろ、と顎をしゃくるエヴァ。

「今聞いた事が本当だと仮定するとして、何故僕の記憶が改竄されているのか？それを決めたのは誰か？最後に僕が此処にいる理由は？」

虚偽は許さない、と目が語つていた。それを受けエヴァはニヤリと笑つた。

その答えを知る為には、エヴァ宅での1時間の会話が全てである。先ずはこれを聞いてからだ。そう言つて、レコーダーを取り出しスイッチを押した。

エヴァから魔法の存在、麻帆良の裏に関する事柄を聞き、ため息を漏らす。

あくまでも彼女からだけの情報。

全て鵜呑みにするのは危険だが、現状一番信用出来て頼れるのは彼女のみ。

海人は、自分の目を信じた。そしてエヴァにレコーダーを借りた。エヴァは首を傾げた。

スイッチを入れ録音し始める。

「僕は、今の所マクダウェルさんが一番信じられると思っています」そう言って、今日有った出来事に対する自分が何を推察し、思考し、行動したかの結果を余す事無く、正直に述べた。

エヴァはそれを聞いて、目を見開き、ほう、それで？と先を促した。

海人はこれから学園長側の行動の予測を述べていく。

「学園長は、多分僕をそちら側へ勧誘するでしょう。

何故なら、魔法の秘匿を第一に考える魔法使いが、記憶の改竄を出来るにも関わらず、無理やり連れて行こうとしませんでした。後で幾らでも改竄出来ますしね。

本来ならその場で改竄するのが一般的だと思います。

この事から僕をそちら側に引き込もうとする魂胆が見え見えです。そして、時間的な猶予を与える、と選択肢も出したのは印象を悪くさせない為。

行動を起こそうとしてもきっと無理でしょう。監視していくのです。

そして、僕の経歴と現在一人暮らしをしている点。

僕は魔法関係者を連想させる土地にいた事がないません。

敵対組織の息が掛かってなさそう、もしくは、簡単に都合のいい洗脳が出来そう、など。

祖父母は此処に居ましたが既に他界済み。

例え、何かがあつても手元に置いておく方が監視しやすいでしょうしね。

そして最大の理由……僕に何かあつても都合のいよいよに処理出

来ます。

捨て駒に使つても事故として押し通せる。何せ1人ですし
飛躍した考えですか?と言い、そこで一息いれて出された紅茶で
唇を濡らす。

エヴァはニヤニヤ笑いながら、それでお前はどうするんだ?と先
を促す。

海人は、お願いがあります、とエヴァを見つめる。

エヴァは、取りあえず言つてみる、聞くだけ聞いてやる、と。

「僕は記憶を改竄してもらおうと思います」

それを聞いてエヴァは失望した。何だ見込み違いか、と。

「但し、そちら側に行き、魔法生徒として動きます」

エヴァはその物言いに矛盾を感じた。どういう事だ?理解が出来
なかつた。

「僕は記憶を改竄してもらう様にいます。そして、マクダウェル
さんは時を見て僕を呼び出してください。

きっと、呼び出した僕の記憶だとマクダウェルさんとは会つた事
がないはずです。

今日僕は、此処にきていない。この記憶なら僕と新田先生の記憶
を弄るだけで済みます。

僕は……そうですね。マクダウェルさんに会つ前に新田先生に接
触しているので、多分その時に実は書類が有つたとか、クラス担任
の先生が実は持つていた、なんて記憶に改竄されているんじゃない
でしょうか。

この辺は自信ないですけど。そして、僕に真実を教えてください。

僕は今の所、学園長が信用出来ていません。

記憶を改竄したとなれば、むやみな接触はしてこないでしょう。

よっぽどの事がない限り。だけど真実を知つた今、なかつた事に
するなんでしたくありません。

しかし僕は、何の力も持つてない只の凡人です。だから、お願
します。協力してもらえませんか?」

そう言つて頭を下げた。

エヴァは、重岡海人に興味を持った。
こいつは、善に見えて悪だ。自分の信念の為なら、平氣で騙すし、嘘を付く。

そして強い意志持つて進んでいく。

面白い、全く以つて面白い。いいだろう！協力してやるうづじやないか！

「いいだろう！協力してやる！感謝しろよ。しかし、あのジジイがどうこう反応をするか楽しみで仕方ないな！」

高笑いをするエヴァ。

海人は最後にこう言つてスイッチを切つた。

「少し未来の僕へ。どうか信じて欲しい。そして今の僕と同じ気持ちになつてくれる事を願うよ。

最後に、どうしても信じられない場合の事を考えて保険を掛けておきます。

正解すれば絶対に信じられる魔法の質問と答えを紙に書いて、マクダウエルさんに渡しておきます。

最悪その方法を試してください。では、未来の重岡海人へ。過去の重岡海人より

海人は、メモに何かを書き込み厳重に折りたたみエヴァに渡した。その時まで絶対見ないでくださいね、と念を押して。

それを受け取つたエヴァは、ふと気付いたように

「しかし、お前が信じて魔法生徒になるのは別に構わんがな？一体誰に指導を頼むのだ？」

海人は、目の前にいるじゃないですか。一蓮托生ですよ？と悪戯っぽく笑つた。

それを聞いたエヴァは目を見開いた後、苦笑し仕方がないなとかぶりを振つた。

これが一週間前の真実であった。

最後まで聞いて、エヴァはスイッチを切った。
海人は全てを聞き終え、俯き頭を抱えていた。

エヴァはその様子に、流石にショックだつたか、と結論付け暫くそつと/or おいた。

暫くして海人が口を開いた。

「想定外です。全く以つて想定外です。こんな……こんな事つて……」

そんな海人の姿に流石のエヴァもいたたまれなくなり、側に寄り肩に手を置いた処で不遜な咳きを耳にした。

こんな告白だつたなんて。全く甘くないぢやないですか、しようとおきます。と。

なぬつ？何を言つとるんだ？「コイツは。

またもや、盛大な勘違いをしてるんじやあるまいな？有りえる。コイツなら充分に有りえる。

「おい。お前そもそも此処に来るのに、何を想定していた？」

聞いてはいけないような気がしたが、聞かずにはいられなかつた。「そんなの決まつてるでしょ？愛の告白以外に何があるというんですか？」

それを聞いたエヴァははずつこけた。だから、何故そうなる！

「アホかー！何処をどう取つたら、あの手紙でその様な判断になるのだ！ええ？」

海人は手紙を取り出し机の上に置いた。

「自宅ポストに投函された手紙。しかも切つてが貼つてありません。これは直接投函された証拠でしょ？そして、何処かの家らしき住所。

しかも夕食時の時間帯。これは一家総出でお出迎え。きっと、シヤイなあの子は、相談したんでしょう。

一人じや恥ずかしくて告白なんて出来ないわー！と。娘の一大決心

に立ち上がるパピーとマリー。

ああ、こうやって娘は大きくなつていくのか、と嬉しさ半分、寂しさ半分。そつと影から見守るつ。

家族みんなでワクワク、ドキドキ。期待に胸が膨らむね。それで皆で待ちましょう

何か間違つてますか?と。冷静に話す海人。

茶々丸はしきりに、名推理です、海人様。そう言つて頷いている。エヴァは思った。

アホだ。アホすぎる……。コイツ、ホントは、ただのアホなのでは?と。

「返せ!今すぐ返せ!先程の私の感動を返せーー!それから茶々丸!お前も納得するな!」

エヴァは海人の胸倉を掴み揺らした。

えー?僕が悪いんでしょうか?絡繆さんは賛同してるじゃないですか。揺すられながら海人は思った。

暫くして落ち着きを取り戻したエヴァは睨みながら

「それで、真面目な話、キサマはこの件の判断はどうなのだ?」「おふざけはここまでだ、と言外にそう告げた。

「信じないというよりも信じられない、と言つたのが正直な気持ちです。その、魔法?ですか、それの存在を見た事なんてないので。マクダウェルさんの事は信用できるのでしょうか?……。僕は自分の見た事しか、100%信じない主義なので。申し訳ないのですが……」

バツが悪そうに笑みを浮かべる。

それを受けてエヴァはニヤリと笑つた。

「ならば、着いて来い。お前に魔法というモノの一片を押ましてやろう」

そう言つて立ち上がつた。

「何処に行くんです?」

戸惑いながら海人は立ち上がつた。

「いいから、黙つて着いて来い。なに、取つて食おうなどと思つたらんよ」

ニヤリと笑つて移動した。

茶々丸がこちらです、海人様。 そう言いながら、エヴァの後に続く。

エヴァは小さな水晶の玉の様な物の前で立ち止った。

「何ですか？これ。水晶？」

海人が首を傾げた。

エヴァは、何、私の別荘さ。田を瞑つていろ。そう指示した。海人は取りあえず言う通りにする。程なくして目を開けると、辺りの様子は一変していた。

南国のリゾート地にいるかの様な風景に変わっていた。海人は目を白黒させた。

え？え？「口は何処ですか？

「ようこそ。私の別荘へ。」

腰に手を当てて、どうだ？良い所だろ？得意げにそう言った。

海人はキヨロキヨロと辺りを見回し呆けている。

「何時まで、呆けている！まあ、いい。先ずは離れて見ていろ！」

そう言つて歩いていく。

茶々丸に促されて、海人はエヴァからある程度、距離を置く。エヴァは、しつかり見ていろよ！そう言つて詠唱を始めた。

海人はその様子を黙つて見つめていた。

詠唱が終わり、エヴァは空に向かつて氷の矢を打ち出す。

その様子を見た海人は、口をあんぐりと大きく開けた。

エヴァは、海人の様子を気にせず、次々と魔法を放つていく。氷の矢が飛び、辺りが凍りつき、吹雪が舞う。

一通り、終わるとエヴァは戻ってきた。

戻つても、海人は口をポカーンと開けたままだつた。

その様子にエヴァは大笑いした。

得意げに、腰に手をあて、どうだ？と言つた。

海斗は、かぶりを振った。

まいった。本当にまいった。

今まで半信半疑でしたが、これでは認めざるを得ないではありますか。

「さあ、魔法は見せてやつたぞ！ 真実を知つた貴様はどうする？ 重岡海人！」

腕を組み、返答を迫つた。

「そんなのは、愚問です。決まつてゐるじゃありませんか」

そう言つて不敵な笑みを浮かべた。

「ここからは、もう後戻りは出来んぞ？ 引き返すなら、これが最後の機会だ。ここから先は、泣こうが、喚こうが、一切容赦のない世界。生きるも死ぬも、頼れるのは己の力のみ。生ぬるい毎日が終わり、殺伐とした日々の始まりだ」

さあ、どうする？ これを見ても変わらぬか？ そう言つてエヴァは睨みつけた。

「くどいです。僕は、僕の意思でこちら側で生きます。僕の意思を曲げる事は何人たりとも出来ません」

力強い意思を瞳に宿し、そう言い切つた。

エヴァは大笑いした後

「ならば、歓迎しよう！ ようこそ、非日常へ！」

そう言つてエヴァは歓迎するように手を広げた。

茶々丸は、これから、宜しくお願ひいたします。そう言つて頭を下げた。

海斗は深呼吸をした。

いいでしよう。過去の僕。しっかりとあなたの意思は、引継ぎました。

そして、これからどうやって移り変わつたこの世界で、立ち回していくか、思案し出した。

これが、重岡海人にとって、2度目の魔法との邂逅だった。

海人のこちらからの日々はこれを機に、波乱万丈な日々に変化して

いく事となつた。

第3話 凡人は魔法を忘れ再び魔法に出会い（後書き）

いかがでしたでしょうか。

はい、もう何も言えません。

感想お待ちしております。

次回から、時間軸を戻そうと思います。

1年の間にあつた事、読みたい方がいらっしゃれば、過去編として
書こうかな、と。

感想、アドバイス、お待ちしております。

因みに作者、原作殆ど知りません。

ごめんなさい。

矛盾だらけの物語ですが、今後とも宜しくお願ひいたします。

お読み頂き有難うございました。

では、また。

第4話　凡人は誤解と誤算の上傷つき倒れる（前書き）

作者のダメ中年です。

第4話お届けです。

しかし、こんな物語待つててくれる人いるんでしょうか？

今回、何時にも増して、駄作です。

精進します。

では、どうぞ。

第4話 凡人は誤解と誤算の上傷つき倒れる

別荘から出てきた海人はリビングで優雅にワインを飲むエヴァを呆れた目で見た。

その視線に気付いたエヴァは、眉間に皺を寄せた。

「どうした？なんだ、その目は」

海斗は、やれやれと首を振り

「またワインですか？たまにはジュースでいいじゃありませんか。」

「正真正銘のお子様なお前には分かるまいよ」

そう言つて意地悪く笑つた。

「お酒って美味しいんですか？中には美味しいモノもあるんでしょうが……。しかしそんな事言つて事は、気にしてるんですか？お

子様体形」

僕は、気にしませんよ？そう言つて笑つた。

「アホ！誰が気にするか！私は好きで飲んでいるのだ！それから、お前はいい加減あきらめろ」

そう言つて見つめる。

海人は眉尻を下げ

「そんなんに迷惑ですか？」

傷つきます、そう言つて口を尖らせると。

そんな年相応な表情に、エヴァは苦笑した。

「そういう意味ではない。お前は私と違つて人間だ。普通に成長し死んでいく。お前と私とでは、立つているステージが違う、と言つたんだ。今は、お互いの人生がたまたま交差しているにすぎん。そういう事だ」

まあ、嬉しくはあるがな、そう言つて笑つた。

海斗はため息を付いた。

「そんな事より、何かツマミを持つて来い。夕食にはもう少し時間が掛かりそうだ」

海人は肩を竦めて

「では、僕がツマミになるようなモノ作ってきます」

そう言つて台所に向かつた。

「ん？お前、料理出来たのか？それは知らなかつた。だが私は味にはつるさいぞ？」

ニヤリと笑つた。

「海人はくるりと振り向くと、ニヤリと笑い「グラハム・カーより美味しく作りますよ」

だから、ほんとにお前は14かつ！

海人はその言葉を受け、クスリと笑い急いで作りに向かつた。

台所では、茶々丸がせつせと夕食の準備をしていた。

少し借りますね、そう声を掛け、冷蔵庫の中身を物色していく。余り待たせるのもどうかと思い、手早く出来るツマミを思案する。少しの間、茶々丸に台所を譲つてもらい、料理をしていく。その様子を見つめながら、茶々丸は海斗に声を掛けた。

「海斗様。少しよろしいでしょうか？」

海斗は、手を休めず、ええ、いいですよ、そう言つて先を促した。「人間とは何でしょう？」

簡潔に纏められたその一言に、海人は、

「それはまた、哲学的な質問ですね。どうしてそんな事を？」

茶々丸は先程のエヴァとの会話を聞かせた。

海斗は、なるほど、と納得し

「想う事、だと想いますよ」

茶々丸は首を傾げた。

「茶々丸さんが、エヴァに尽くすのは、プログラムだからですか？」

「私は、作られた瞬間から、マスターに仕える事が仕事です」

「エヴァに妹と言われ何も感じませんでした？」

「それは……、と言ひよどんだ。

「では聞きます。想像してください。お前はただの従者で道具だ、

そうエヴァに言われたらどうですか？」

「それは、正しい認識です。私はガイノイドで、従者ですの……しかし……」

そう言つて俯いてしまう。

「でも、何となく嫌なんでしょう？それは、茶々丸さん自身、家族と言われて嬉しかったのではないのですか？自身の在り方を知つても、家族と言われる事が。何よりエヴァに言われたことが」はつとして顔を上げた。

「それが、嬉しいと言うことです。茶々丸さんは、知らず知らずの内に、エヴァに対し主人という立場以上の想いを持つてゐる事に他ならない、と僕は想います。決してプログラムではないでしょう？そういう事ですよ？」

海斗は優しく微笑んだ。

「僕だって、人間とは？なんて質問に答えを出せるほど、賢くありません。だから、僕たちなりの答えを、一緒に探していくませんか？」

焦る必要はありませんよ？そう言つて微笑んだ。

茶々丸は僅かに顔を綻ばせ、宜しくお願ひします、と頭を下げた。「では、ツマミ持つていきますね。余り待たせると拗ねちゃいますから」

そう言つて海人は出来上がったツマミを急いで持つていった。

エヴァは、持つてきたツマミを一警し、中々美味そうだな、と評価した。

「口に含えればいいんですがね。まあ、ワインには合うと思いますよ」

「酒の飲めない奴のツマミか。フン、まあいい。試してやる」

そう言つて一口食べた。目を瞑り、時折、頷いている。

「まあ、及第点はくれてやろう。悪くない」

そう言つてワインをクイッと飲んだ。

ツマミは、タコとジャガイモを炒めた物とクラッカーにカマンベールチーズを乗せその上から蜂蜜を掛けた簡単なモノだった。

「そう言えば、そこそこ形になつて來たから、次の段階に進むとす

るぞ」

「次は何をするんです？」

エヴァはニヤリと笑い、

「咸卦法さ」

「咸卦法つて、究極技法つて言つてませんでした？」

「ああ、故に習得は容易ではない。だが、習得できればこの上ない武器になる。お前は魔力量も気の量も、凡人並みだ。習得できたとしても、僅かな時間しか発動出来んが、それでも切り札には充分なる。しかし、お前なんで、魔法の発動があんなに出来ないんだ？基礎中の基礎である魔法の射手にしても、成功率6、7割だろう？」

「僕に聞かれても。魔法以外は、そこそこ出来るんですけどねえ」

海斗は、魔法が何故か上手く発動できない。気の運用は出来るのだが。

「体质なのか？いや、『火よ灯れ』は発動出来たし……。そう言えば、お前の祖父母はここに居たんだったな。何か聞いてないか？どんな些細な事でもいい。」

「いえ。特に何も。祖父母が此方に引っ越してきたのは、友人にいひ所だから、と誘われたのが切欠らしいですよ。それまでは、ずっと三鷹でしたし。定年してこちらに引っ越してきましたから。出身もずつと三鷹です」

「祖父も父もサラリーマンだったな？確かに、祖母も母も専業主婦。うむ。絵に描いたような平凡な一家だな」

「ほつといて下さい。いいじゃないですか。それで平和なら」

海斗は拗ねた。

「お前の祖父母は、父の方だったな？」

確認するように聞くエヴァ。

ええ。それが何か？そいつて海人は首を傾げる。

エヴァは腕を組み、眉間に皺を寄せ考え込んだ。

「重岡……重岡、か。もしかしたら、お前は西洋魔法より、東洋の魔術の方が性に合ってるかも知れん。可能性はかなり低いと思うが」

「どうじうことですか？」

まあ、今は気にするな、そつ言つてエヴァは話を打ち切つた。

「そんな事よりも、これからお前はどうすのだ？」

「どうとは？」

「お前は学園側から目を付けられている。そろそろ感づかれるぞ？」
このままでばれるのは時間の問題だ

そう言つて、海人を見つめた。

「そうですねえ。ここではつきりスタンスを大っぴらに宣言してしまつても問題はないのですが……」

海斗は軽くため息を付き

「ばれるのはいいんです。其れなりに騙していた事の理由はありますから。しかし、それを逆手に取られ主導権を握られるのは避けたい所です。何とかエヴァに手伝つてもらいながら誤魔化してきましたが……」

うーん、と考え込む。

「いい案が思い浮かばないので、取りあえず保留で。近いうちにいい案を出します」

では、帰りますね、そつ言つて立ち上がつた。

「メシぐらい食つていけ。茶々丸に用意させている」

「え？ いいんですか？」

「なに、たまには構わんさ。食べて行く時間ぐらいあるだろ？？」

お言葉に甘えます、そつ言つて海人は笑つた。

茶々丸の料理に舌鼓みを打ち、帰ろうとしている所でエヴァから声を掛けられた。

エヴァは言いくさつに

「まあ、その、何だ…… そつきの事は気にするな。お前の事を嫌つてる訳でもないし、迷惑とも思つてなどいない。ただ…… やはり私とお前とでは、生きる時間が圧倒的に違うのだ。お前の気持ちは、嬉しいが……」

すまない、そつ言つて頭を下げる。

海斗は、頭を下げるままのエヴァをそっと抱きしめた。

「解っています。解つてはいるんですけど……。エヴァが謝る事なんてないんです」

そう言つて頭を撫でた。そして手を離し、

「あはは。今日も振られてしましました。それじゃおやすみなさい」

そう言つて笑つた。泣きそうな笑顔だつた。

エヴァはその笑顔に何も言えなかつた。去つていく海斗に僅かに逡巡し、

「カイ！……その、気を付けてな」

そう言つて微笑んだ。

ありがとう、お休みエヴァ、そう言つて走つて帰つて言つた。

エヴァは、その姿を見えなくなるまで見ていた。

後ろから茶々丸がマスター、と声を掛けた。

エヴァは、何も言つてくれるな、そう言つて自分の部屋に戻つて言つた。

茶々丸はその姿を黙つて見つめていた。

海人は家に着くと、真っ先に風呂に入つて汗を流した。風呂から上がり、パックのまま牛乳を一気に飲む。

こんな事が出来るのも一人暮らしの恩恵ですね。いや、親に感謝です。

それにしても儘ならないものです。どうすればいいんでしょうね……。

ブルーになる気持ちを切り替えるために、明日の予定を考えいく。

そう言えば、手持ちが少しばかり心許ないです。

明日下ろしに言つて、食材も買わなくては……。それから本屋にでも寄つて……服も買いたいですね……。

ベッドに入り、そんな事を考えながら、夢の中へと落ちて言った。
翌朝、普段より少し遅めに起床し、朝食を食べながらその日一日のスケジュールを立てて行く。

食べ終え、後片付けし、簡単に家の掃除をし終わった頃には昼に近い時間になつていった。

海斗は、まず、お金を下ろしに行つた。

さて、お昼でも食べましょうか。どこかいい所は……。と思案していると声を掛けられた。

「あれ？重岡君やない？どうしたん？こんなところで」

声を掛けてきたのは、近衛木乃香だった。1年前の事件の日に知り合つてから、ちよくちよく、学校や街で遭遇し、話す程度には仲良くなつた二人だつた。

「ああ、近衛さんですか。珍しいですね。お一人ですか？」

海人が会う時は、大体、木乃香は誰かと一緒にいる。

「そなんや。明日菜も、部活の皆も何か用があるつていうねん。せやから、今日は1人なん。重岡君は、何やつてるん？」

海斗は簡単に事情を話した。

「そかそか。これからお昼なんやな。せやつたら、一緒にどうや？ウチもそろそろお昼にしようと思つてたところや」

そう言つて笑つた。

海人としては、エヴァアから木乃香の立場は聞いている。

関東魔法協会会长の孫にして、関西呪術協会の長の娘。

学園側から目を付けられている海斗に取つては、余り仲良くしていられる所を見られたくないのが心情だ。

現状の立場は別として、個人的にはいい子だと思ってるので嫌いではない。

まあ、神経質になりすぎるのも問題だと思つて、快く了承する海人だつた。

手取り早く、ファーストフードの店に入る。

それぞれ注文し席に着く。

「そう言えば、はじめてやなあ。重岡君といつやつて話すんは。何か不思議な感じや」

木乃香は「一二一」と笑った。

「そうですね。普段は少し話す程度ですもんね」「海斗もそう言って笑った。

「なあ、そんで考えてくれたん?別にええやん。重岡君、別に他の部活動しておらん言つてたやん。な?」

木乃香は、会つ度に自分の部に誘つていた。

「図書館探検部……ですか。その、僕にはちょっとアドベンチャーすぎるところが……」

「めっちゃ楽しいで?図書館島をな、こいつ、探検するんや。大丈夫やで。ウチも付いとるし、そんな危ないトラップもないで?どや?樂しそうやろ?」

身を乗り出して勧誘してくる木乃香。

いや、トラップつて……。そもそも図書館にトラップがある事自体、おかしいでしょ?」「僕も色々と忙しいので。一人暮らしですから」

そう言って、やんわりと断る。

「そつか。残念やなあ。でも気が変わつたらいつでも言つてや。重岡君な大歓迎するで!」

「何でそんなに熱心に誘つんです?僕なんかを

木乃香は満面の笑みで

「ウチの勘や!重岡君が入れば、今よりめっちゃ楽しくなる氣がするんや!」

その根拠は一体どこからくるんですかねえ。

海人は苦笑した。

木乃香は、それにしても……、そう言つて

「何か、ウチら"データ"みたいやん?周りの人もそう思つてるんかなあ。なあ、どう思つ?」

木乃香は悪戯っぽく笑つた。

「うーん、どうでしょ。見る人が見ればそう写るでしが……。」

僕は余り気にしませんので」

海人は苦笑した。

「何や、詰まらんない。もうちょっと、慌てもええやん。ウチつ

てそんなに魅力ないん?」

「いえいえ。そんな事はないですよ?近衛さんは魅力的だと思いま

すよ」

そう言って笑った。

木乃香はじつと見つめて

「なあ、何かあつたん?何か元気ないなあ。悩み事もあるん?」

海人はその言葉にドキッとした。

海人は首を振り、そんな事ないです、と嘯いた。

木乃香はその様子に、んー、と唸つて、ポンと手を叩いた。

「もしかして……恋の悩みとちゃうん?」

海人はその言葉に始めて狼狽した。

何で解るんでしょう?そんなに僕って分かり易いでしょ?うか……?

「うそ!ホンマにそうなん?めっちゃビックリや!」

今度は木乃香が狼狽した。

「なあ、良かつたら相談に乗るで。」

木乃香はそうもちかけた。

海人は、大丈夫です、そう言って笑った。

木乃香は、腕を組み暫く思案した後、徐に立ち上がり、ほな、行くで、そう言って彼の手を引っ張り店の外へ連れ出して行く。

「ちょ、ちょっと何処に行くんです!近衛さん!」

何も答えず、ズンズン進んでいく木乃香。

公園に着いたところで、木乃香は手を離した。

「店の中じゃ人が一杯で、話せないやう?ここなら大丈夫や!」ここにはウチらしか居らん

そう言って笑った。

「でも、先ずはウチの方が先や!ウチの悩み聞いてくれへんか?」

これで、お相子や！そう言つて近くのベンチに座つた。

「ウチな、仲良うしたい子がおんねん。せつちゃん言つてな？クラスマートで、実は幼馴染なんや。

でも、何か今は避けられとるん。小さい頃はめつちゃ仲良かつたんやで？

話しかけても逃げてしまふんや。何かウチが悪い事したんなら、謝りたい。仲直りしたい。

でも、中々切欠が掴めないんや」

そう言つて寂しそうに笑つた。

「原因に心当たりは？」

木乃香は首を振つた。

「ウチとせつちゃんは、元々京都にいたんや。その時に知り合つたんや。お父様に紹介してもらつてな。

それから、毎日遊ぶ様になつてな？せつちゃん、このちゃん、そう呼び合つて……。

楽しかつたなあ、あの頃が一番輝いとつた。キラキラいう感じにな

思ひ出しているのか、俯き、肩を震わせる。

「近衛さんは、あきらめるのですか？まだ何も聞いてないのに。その彼女の心境は分かりませんが、近衛さんはまだ、何も聞いてないんでしょう？

本当に嫌われているのかも知れない。でも何かの事情があるのかも知れない。

今の段階では全て憶測にしか過ぎません。それなら、先ずは行動を起こして見ては？」

木乃香は、どうすればいいん？縋る様に見つめた。

「例えば、共通の友人か彼女の親しい人もしくはルームメイトとか、に呼び出してもらうとか。

逃げられるなら、自分の部屋に連れて来てもらうとか。もしくは、自分が彼女の部屋に着くまで引き止めてもらつておくとか。彼らで

もやりようがあります。

「一人じゃ出来ないなら、話せる友人に協力してもらつて、無理にでも話せる状況を作ればいいんです。」

「先ずはそこからではないでしょうか？僕はそう思いますよ」

「それに……と続けて

「どんな結果であれ、また仲良くなる事を諦めるつもりはないのでしあう？」

「それに……近衛さんが、誰かに嫌われるような真似をするとは思えませんし、嫌われやすい人でもないのは、分かりますよ？自身持つていいと思います」

海斗はそう言って笑つた。

木乃香も、ウチ、頑張つてみるわ！満面の笑みでそう言つた。

「おおきにな。何かやる気出てきたわ！さて。次は重岡君の番やで！」

「そう言って海人を促した。

海人は、ふう、とため息を付き、詳しい事情はいえませんが、そ
う前置きして

「近衛さんのお察しの通り、僕には好意を持つている人がいます。
まあ、悩みとはその事ですよ」

海人はそう言って苦笑した。

「もう、告白はしたん？」

「告白というか、向こうは僕の気持ちは知つています」

海人は空を見上げながら言つた。

「他に好きな人がいるとか？ま、まさか人妻と、ちゃうよね？」
海人は笑いながら、当たり前です、と言つた。

「学年は一緒です。付き合つてる人はいませんよ」

「それって、ウチが知つとる人なんか？だ、誰や！？」

「それは秘密です」

海人はそう言って首を振つた。

「で、でも、教えてくれれば、ウチが協力出来るかも知れへんで？」

好奇心もあつたが、何とか力になつて上げたい、そつ思つ木乃香だつた。

「お気持ちは有り難いのですが……こればっかりは第三者がどうこう出来る問題じゃないのです……。ああ、勿論近衛さんに限らずですよ?まあ、ちょっと複雑な事情があるので」

そう言つて笑つた。

木乃香はその笑顔が泣き笑いに見えた。その表情に胸がきゅうつと苦しくなつた。
切ないなあ。苦しいんやうなあ。きっとウチよりも辛いんやうなあ。

木乃香の目に涙が溜まり、頬を伝わつていく。

海人は優しく微笑んで、ハンカチを取り出し涙を拭つてあげた。

「近衛さんは優しいですね。近衛さんが泣かなくともいいんですよ?」

「これは、違うんや。重岡君が泣かへんから、ウチが変わりに泣いとるだけや」

海人は、ありがとう、そう言つて、ハンカチを渡した。

木乃香は涙を拭つた後

「お互い、頑張ろうな?ウチも諦めへんから、重岡君も諦めたらあかんで!」

そう言つて笑つた。

「そうですね。お互い頑張りましょう。上手く仲直り出来たら教えてくださいね?」

そう言つて海人も笑つた。

「当たり前や!重岡君も、上手くいつたら紹介してな?約束やで?」

もちろんです、海人は快く了承した。

暫く、談笑し日が傾き始めた頃、木乃香に、明日菜から連絡が入つた。

何でも、家に帰つて来たはいいが、木乃香がいない。それで夕飯の事もあり連絡したとの事。

木乃香は、急いで帰らんと！そう言つて慌てて走り出した。公園の出口で、ありがとなー！そう言つて手を振り元気よく駆けていった。

海斗はその姿に、微笑ましいモノを感じ、クスリと笑つた。空を見上げ、こんな1日も案外悪くないですね、そう思つた。さあ、僕も帰りましょう。

そして、ゆっくりと歩き出した。

公園の出口に差し掛かると、目の前に1人の少女がいた。竹刀袋を肩に下げ、髪をサイドポニーにし、凛々しい顔立ちの少女だった。

じつとこちらを睨んでいる。

海人は、意味が解らず、触らぬ神に祟り無し、の言葉通りに、通り過ぎようとした。

その瞬間声を掛けられる。

「貴様、お嬢様に何をした？」

一瞬、海人は何を言つているのか解らなかつた。

「は？お嬢様？一体誰です？」

首を傾げる海人。

「しらばっくれるな！先程、お嬢様を泣かしておいて！貴様、何者だ！」

ん？泣かした？えーと、もしかして？

海人は、エヴァから聞いた事があつた。近衛木乃香には、護衛が付いている、と。

もしかして、この子なんでしょうか？

ここは、知らない振りをするのが上策ですよね。

海人は、いち早く判断すると、

「えーと、お嬢様つて、近衛さんの事ですか？あのー、それが何か

？」

田の前の少女は、苛々したように

「さつきから、そつだと言つていい！いい加減惚けるのはやめろ！」

お嬢様に何をしたのか聞いている！言わないと言うなら……」

そう言って目の前の少女は、竹刀袋から、その少女には不釣合いな刀を取り出した。

いわゆる野太刀と言われる刀だった。

海斗は、以外と冷静だった。

いきなり、バイオレンスな、展開ですねえ。

ん？この状況もしかして使えるかも……。

自分は、魔法生徒ではない。表向きそくなっている。

でも、ばれるのは時間の問題。

ばれた時、その事で主導権を握られ、不利な状況にされたくない。ならばこの状況を利用して、有利に事を進めますか。

目の前の少女には悪いですけど。

まあ、いきなり切りかかる事はないでしょう。精々脅し程度でしょうし。

向こうは自分を一般人だと思っているのですから。
さて、具体的にどうやって事を運びますかね？

海人はどうやって立ち回るか、高速に思考を回転させた。

海斗に取つて唯一の誤算は、この目の前の少女は近衛木乃香の事となると、タガがはずれ、暴走する、というのを知らない事だった。

海人が血だらけで倒れている所を発見されるのは、この1時間後だった。

第4話　凡人は誤解と誤算の上傷つき倒れる（後書き）

いかがでしたでしょうか？

小説は、難しいです。

実は、主人公の名前ですが、ある実在の人物の名前を弄っています。
さて、誰でしょう？

簡単すぎますね。

アドバイス、感想、お待ちしております。

何でもいいです。感想プリーズ！

失礼しました。

では。また。

最後に、お読み頂き、有難うございました。

第5話　凡人は倒れた後に何事も無かつた用に復活する（前書き）

作者のダメ中年です。

第5話お届けです。

今回も、急いで書いたので粗が目立つますが
暖かい目で読んでください。

シリアルが続きます。

海人の勘違い、書いてえ。

うそです。失礼しました。

心待ちにしていた方（いないと思いますが）
お待たせです。

では、どうぞ。

第5話 凡人は倒れた後に何事も無かつた用に復活する

エヴァが海人の状況を知つたのは、次の日、教室に入つて暫くしてからの事だつた。

ガヤガヤと煩いクラスメートを冷めた目で見ていると、クラスのパパラッチ事、朝倉和美が騒ぎながら教室に飛び込んで来た。教卓に陣取り、得意げに喋りだす。

「ニュース！ニュース！大ニュース！昨日、通り魔事件が発生！

被害者は私たちと同じ年齢の男の子！ほら、学年代代表の……」

そこまで聞いた時エヴァの心臓が凍りついた。

ガタツと椅子を倒し立ち上がる。しかしその様子は誰にも見咎められる事はなかつた。

それよりも、大騒ぎした人間がいたからだつた。それは、近衛木乃香だつた。

「その話もつと詳しく教えてや！」

瞬時に詰め寄り問いただす。余りの剣幕に朝倉和美の方が吃驚している。

エヴァもツカツカ近寄り、有無を言わさない口調で

「さつさと話せ。朝倉和美。知つてる事全てだ」

木乃香が、隣に来たエヴァに視線を移した。木乃香には、焦つている様に見えた。

「え、えーと、私も詳しく述べ知らないんだけど……。何でも昨日の夕方に公園で血だらけで倒れてるのを、通り掛かった人が発見してすぐに救急車で運ばれたらしいよ」

木乃香は呆然とし、

「うそや……まさか……あの後……」

顔を青くして震えている。それを耳にしたエヴァは

「おい、近衛木乃香、貴様何か知つていてるのか。何を知つていてる！」

今度は木乃香に詰め寄った。

木乃香はうろたえながらも、昨日公園で少し話し別れた事を話した。

「エヴァはそれを聞くと、今度は和美に視線を移し搬送された病院は何処だ？」

そう聞いた。

「『めん。そこまではちょっと……』

和美が申し訳なさそうに言った。

エヴァは苛立ちを隠さず舌打ちをし、茶々丸を伴い教室を出て行く。

木乃香は慌ててエヴァを追いかけた。

木乃香は、教室を出た所で声を掛けた。

「な、なあエヴァちゃん、何処行くん？ 重岡君とは親しいん？」

エヴァは、煩わしそうに

「別に。何度も話した事があるだけだ」

素つ氣無く言つ。木乃香は、その態度に腑に落ちない物を感じた。そんなら、何でそんなに慌てたん？

そう思つたが取りあえずは口に出さないことにした。

「何処まで着いてくるつもりだ。近衛木乃香」

そう言つて立ち止まり、振り向く。

木乃香はその顔がひどく怒つてる様に思えた。

「なあ、何でそんな怒つとるん？ ホントは重岡君と親しいちやうん？」

おずおずとした感じで言つた。

「別に、怒つてなどいないし、そして親しい訳でもない
明らかに不機嫌そうな感じで答える。

お前は早く教室に戻れ、そう言つて足早に去つて言つた。

木乃香は釈然としなかつたが、授業の為教室に戻つた。

エヴァは屋上に着くといつも一樣で過ぐす位置にどっかりと腰を付いた。

唇に手をやりつめを噛む。その様子に、茶々丸は、マスターと一
声掛けた。

その声に反応すらせず、エヴァはじっと考え込んでいる。
やがて、茶々丸に向かつて指示を出す。

「先ず、何処に搬送されたか調べる。私たちは堂々と表立つて動け
ない。繫がりがばれてしまうからな。後は誰がやったかだが……。
チツ！現状では情報がない。取り敢えずは、カイの回復を待つし
かないが……。容体も分からんか……聞く事も出来んし……」

ブツブツ言いながらまた考え込む。

そんな様子を茶々丸は心配そうに見詰めていた。

教室に戻った木乃香は、意氣消沈といった様子で席に座った。心
配した明日菜が声を掛ける。

「大丈夫？木乃香……。その……無事だといいわね」

そう言つて黙り込んだ。

明日菜も昨日、木乃香から海人との事を聞き自分の事の様に喜ん
だ。

刹那の事も多少知つてるので、常々何とか2人の関係を修復させ
たいと思っていた。

渡りに船とばかりに張り切つて、自分も協力するわ！と宣言した
矢先の事だったので、ショックだつた。

海人の事もそんなに親しい訳でもないが、悪い奴には見えなかつ
たし、昨日の一件でさらに評価が上がつっていた。明日菜は元気付け
るようにな

「木乃香、病院の場所聞いて、お見舞いに行こ？ね？」
そう言つて声を掛けた。

「そうやな……。ありがとな、明日菜」
そう言つて笑つた。

「しつかし、許せないわね！その犯人！見つけたら口じゃおかないと
んだからっ！」

そう言つてブンブン怒り出す。

「ウン、ウチもやー絶対許せくん！償つてもうらわな、ウチの気が済まんえ！」

私も私も！そう言って追従する明日菜。

「それに、折角、せつちゃんとの仲直りの作戦を教えて貰つたんやから、実行せな申し訳たへんやん。弔い合戦や！」

そう言って立ち上がり気合を入れる。

明日菜は、勝手に殺しちゃ可哀相よーと突つ込みを入れた。

「でも、木乃香、どうやって仲直りするの？何か作戦あるの？」

「それ何やけど……」

そう言って木乃香は教室を見回した。

「せつちゃん見当たらんのや……。どうしたんやろなあ」

明日菜はそこで提案した。

「それなら、同じルームメイトに聞いた方が早いんじやない？」

そう言って、龍宮真名を指差した。

木乃香は、明日菜、グッジョブやーとついついて立ち上がった。
2人で真名に近づく。

声を掛けたのは明日菜だった。

「龍宮さん、ちょっといい？」

そう言って切り出した。

真名は、ん？何だい？そう言って顔を向けた。

明日菜は木乃香にバトンタッチした。

「あんな？せつちゃん、何処に居るか知らん？今日まだ、見てない
んや」

「ああ、刹那かい？何か今日は具合が悪い、とかで休むらしいよ」

真名は肩を竦めそう言った。

木乃香は、それを聞いて、そつなんか……、と考え込んだ。

「なあ、龍宮はん。ちょっと協力して貰つてもええやろか」

真名は、怪訝な顔で

「どんな事だい？あんまり、面倒な事は」「免」「むるよ」

「そんな難しい事ぢやうで。今日な、せつちゃんのお見舞いに行き

たいんや。せやから、お邪魔する事と、せつちゃんにはその事を一緒にしていく欲しいんや。後、出来れば引止めといてくれるとバッちりなんやけど……頼めないやうか？」

上目遣いでお願ひする。

真名はそのお願ひに

「何だ、そんな事かい？ そんな事ならお安い」用を「
そう言つて笑つた。

「ありがとなー。そんなら、夕飯はウチが腕によりを掛けで作るで！ 皆で食べたらきつとめっちゃ美味しいで！ 期待しててや！」

そう言つて満面の笑顔を浮かべた。

ああ、期待してるよ、そう言つて真名も笑つた。

明日菜も、木乃香、頑張ろうね！」と言つて笑つた。

木乃香は授業中も終始笑顔だった。

放課後になり、龍宮は、じゃ先に帰つてるよ、そう言つて先に帰つた。

木乃香と明日菜は、すぐにスーパーに寄り夕食の材料を買って、刹那達の下へ急いだ。

着いたのは丁度夕方だった。木乃香は、気合を入れてチャイムを押した。

程なく、真名が出てきて、待つてたよ、と言つて一人を招いた。

入ってきた2人に刹那は吃驚して

「お、お嬢様！ な、何故ここに……」

おろおろし始めた。

「あんな、せつちゃんが具合悪いゆうのを聞いてな？ お見舞いに来たんよ」

そう言つて笑つた。

刹那は、真名をキツ！ と睨みつけたが、真名は肩を竦めただけだつた。

「せつちゃん、大丈夫？ すぐに美味しい物作るから、ちゅう、待つててな」

そう言つて台所に向かつた。

刹那は逃げ出そうとするが、真名と明日菜に止められる。

刹那は、そわそわして、心こゝにあらず、といつた状態になつた。真名はその様子に、眉間に皺を寄せ、

「どうした？刹那。昨日のタベから、おかしいぞ？何かあつたのか？」
そう言って問いただす。

刹那は、いや、何とも、さう書いて黙り込んだ。

その様子に真名も追求しなかつた。

程なくして、部屋に美味しそうな香りが充満し、食卓に次々に料

理が並べられていく。

木乃香は寂しそうに

「な、なあせつちゃん、ウチの料理不味いん？それともまだ具合悪いか？」

ごめんなあ、そう言って木乃香は謝った。

うの間で結婚である。陽が舞へなつかさに所で、明田山が

「そ、そういうば、昨日通り魔事件があつたのみー。」

そつぱんに話題を変えてやつとした。

だつた。

「そりなんよ。あんな？重岡君言うてな？ウチの相談に乗ってくれた子なんや。せっちゃんの事も話したんやで」

刹那は、顔を真っ青にして、俯いた。

それに気付かず木乃香は話し続ける。

「ウチの恩人みたいな子や。真剣にウチの悩み、聞いてくれてな？アドバイスもしてくれたんや。だから、犯人にはめつちや腹たつわ

そこまで言ったとき刹那の様子がおかしい事に気付く。

顔が真っ青を通り越し、白くなりガタガタ震え始める。

その様子に木乃香が

「せ、せつちゃん？ どうしたんや？ 大丈夫か？ まさか…… 何か知つてるん？」

その一言に刹那は大きく肩を揺らした。

耐え切れなくなつた刹那は部屋を飛び出した。

それにいち早く反応した真名も追いかけていく。

それに遅れて、木乃香も追いかけた。

明日菜に、ここで待つように指示して。

真名は、刹那！と叫び、追いついて肩を掴む。

刹那は必死に振りほどこうとする。あまりのその様子に真名は、落ち着かせようと声を掛けた。

「刹那！とにかく落ち着け！ どうしたんだ！ 何時ものお前らしくないぞ！」

刹那は、ほつといてくれ！と叫び、もがく。

只ならぬその態度に真名も必死に抵抗する。

その時、木乃香が追いつき

「せつちゃん！」

と声を掛けた。

刹那は、ビクッと肩を揺らし、抵抗するのをやめた。

木乃香は、ハアハアと息を切らせ、刹那の肩を掴み必死な形相で「な、なあせつちゃん。何か知つとるん？ なあ？ 知つとるんやろ？ 教えて！ なあ！ 賴むわ！ どんな些細な事でもええねん！ 重岡君は、ウチの恩人なんや！ この通り！ お願いや！」

そう言つて肩を揺らす。

「わ、私、私は……私は……」

そう言つて俯く。

その時、別の方向から声が掛かつた。

「その話じっくり聞かせてもらおうか！」

そう言って、茶々丸を伴いゆっくりとした足取りでエヴァが歩い

てきた。

エヴァの登場にその場にいる3人は吃驚する。

エヴァは、刹那の正面から睨むように見据え

「キサマの知つてゐる事を全て話せ。虚偽は許さん！拒否するなら…」

「そう言つて木乃香の方に目を向けた。

瞬間、刹那の心臓が凍りついた。

600万ドルの賞金首、闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

裏の世界を知る刹那だからこそ、エヴァが何を考えているのか想像が付いてしまった。

きつと拒否すれば、木乃香を人質にするだろう。

この場で木乃香を庇いながら戦える程甘い相手ではない。真名に頼んだところで協力してくれるだろうか。真名は傭兵だ。

その辺はシビアに判断する。友人のよしみで、多少の時間稼ぎはしてくれるかも知れないが、それだけだろう。
かと言つて……、それに何故、エヴァンジェリンさんが……？そ
う思案していると

「なあ、何でエヴァちゃんがここにいるん？やつぱり重岡君と何か
関係あるんか？」

木乃香が声を掛けた。

「近衛木乃香。お前には関係ない。お前は家に戻つてひ
にべもなく言い放つ。

流石に温厚な木乃香も、この言葉にはカッとなつた。

「関係ないなんて事はあらへん！ウチは友達や！彼はウチの恩人や！エヴァちゃんやつて言つてたやんか！重岡君の事は親しくないって！関係あらへんのはエヴァちゃんの方やろ！」

木乃香には珍しく声を荒げた。エヴァもその言葉に

「ふざけるなよ！近衛木乃香！何も知らんヤツが！あまり調子に乗
るな！」

そのセリフと共に濃密な殺氣を叩き付ける。

瞬間、3人の背筋に冷や汗が流れた。

木乃香はその殺気に体を震わせ、刹那と真名も動けなかつた。

ふつと殺氣を解き刹那に再び声を掛ける。

「さあ、話してもらうぞ？ 桜咲刹那。よもや、拒否はするまいな？」

有無を言わせない口調だつた。

観念したかの様に刹那は頷いた。

着いて来い、そう言って先導した。

木乃香も着いて行こうとしたがエヴァに止められた。

木乃香は、裏では重要な立場にいるにも関わらず、その事を全く知らない。

この話を聞くといふ事は、即ち木乃香もその事を知るといふ事になる。

木乃香以外は問題ない。皆その関係者だからだ。

ただその特殊な立場上、話を聞かせるには問題があつた。

エヴァは単に面倒くさい、といふ理由でしかなかつたが。

木乃香は必死に言い縋つた。

エヴァは煩わしくなり、気絶させようか、と動こうとした時だつた。

「その話、僕も聞きたいね」

声を掛けたのはタカミチだつた。エヴァは舌打ちをし、厄介な事になつたと思つた。

「何でお前がいる。タカミチ」

そう言つてエヴァは眉間に皺を寄せた。

「朝倉君に聞いたのさ。この事をエヴァが随分気にしていたつて。君は、重岡君とは何も接点がなかつたはずじやないか？」

違つかい？ 言外にそう込め、目を細めた。

エヴァは自分の迂闊さに歯噛みした。あのお喋り女が黙つている筈なんかない、と。

気付かれないと自分を監視していたのか、と。

自分でも気付かない程、動搖していた様だ。

ここで呆けては余計に自分達の首を絞める事になる、と判断したエヴァは再度舌打ちをし了承した。

「じゃ、行こうか」

そう言つてタカミチは歩き出した。

「待て。何処に行くタカミチ」

そう言つてエヴァは問い詰めた。

「何処つて、学園長室だよ、エヴァ」

そう言つてタカミチは笑つた。エヴァは瞬間理解した。

やられた！あのジジイは、これを逆手に取つて木乃香への魔法ばれのスケープゴートにするつもりだ、と。エヴァはタカミチを睨みつけた。

タカミチは何処吹く風、と言つたように飄々としている。

エヴァは再度歯噛みした。まんまとしてやられた。

カイ、すまん。これは完全に私の落ち度だ、エヴァは心の中で海上に謝罪した。

程なくして学園長室に着き、皆でぞろぞろ入つていく。

刹那は顔が真っ白だった。

中には学園長1人が座つて待つっていた。

皆がソファに腰掛けた所で学園長が口を開いた。

「さて、皆が集まつた所で話しあうかの。先ずこの度の事件について知つたる者は、包み隠さず話して欲しい。」

そう言って学園長である近衛 近右衛門は皆を見渡した。皆の視線は刹那に移動した。

刹那は俯いたまま、涙を流し始めた。木乃香が背中を擦り、必死に慰めた。

やがて、一通り落ち着くと、事の詳細をポツリポツリと語りだした。

木乃香が海人と一緒にお昼を食べた事。その後2人で公園に移動した事。何やら2人で話していた事。話している途中で木乃香が泣

き出した事。それを見て怒りが沸いた事。

その後また少し話していた事。最後に笑つて公園で別れた事。ゆっくりゆっくり話して言った。

そして、自分が公園の入り口で待ち伏せした事。木乃香と何をしていたか問いただした事。

海人が話していた内容を言わないで無碍にされた事。それに怒りを感じた事。

売り言葉に買い言葉で口論となつた事。そして怒りに任せて、タ凧を抜いていた事。

そこまで言って、刹那は押し黙つた。

その様子に、木乃香は嫌な予感を感じた。

学園長を始め皆の顔が強張つて行く。

そして最後に、刹那は泣きながら、

氣付けば、自分が海人を斬つていて、その後一般人を斬つた事に恐怖を感じて逃げた事を告げた。

その瞬間、エヴァから先程、木乃香に向けた時とは比べられない程の濃密な殺気が放たれた。

エヴァは自制が効かなかつた。

こんな事をすれば、海人との関係がばれてしまふ事は分かつていた。

頭では理解しているが、感情が追いつかなかつた。

その殺気に学園長を始め、全ての人間が凍りついた。

「桜咲刹那、遺言はあるか」

そう言つてユラリと立ち上がつた。

それにいち早く反応した近右衛門は、

「待つんじゃ！ エヴァ！」

そう言つて立ち上がつた。

エヴァが刹那を手に掛けようとした瞬間、タカミチがエヴァの肩を抑えた。

「エヴァ、それだけはダメだ！ それだけは、やつちやいけない！」

エヴァはタカミチを吹っ飛ばす。タカミチは壁に叩きつけられた。エヴァは激高し再度、刹那を手に掛けようとした。

それに割つて入ったのは以外にも茶々丸だった。

「そこをどけ！茶々丸！何故そいつを庇う！返答しだいではお前でも許さんぞ！」

エヴァは茶々丸を睨みつけた。

茶々丸は、首を横に振り

「桜咲さんの為ではありません。マスターの為です。そんな事をすれば、きっと海人様は悲しみます」

そう言つてエヴァを見詰めた。

エヴァは茶々丸睨み、舌打ちをして、どつかりとソファに沈みこんだ。

一同はほつとした。

暫くの間誰も言葉を発せなかつた。沈黙の後

「な、何でや？何でせつちゃんはそんな事したん！何でやー・どうしてやー重岡君は、せつちゃんと仲直りしたい言つたら、アドバイスしてくれただけやー・どうして、せつちゃんが傷つけなあかんかったんやー・答えてやー・せつちゃん、どうじてやあ……」

そう言つて泣き崩れた。

刹那はその木乃香の言葉に硬直した。

「あ……あ……」

と口をパクパクし、過呼吸状態になつていぐ。

真名がそれに気付き、刹那を抱きしめ、背中を擦り、落ち着かせる。

木乃香もその様子に気付き、刹那に抱きつきわんわん泣き始めた。刹那も過呼吸が收まり、木乃香に抱き着き泣き始めた。

お互に、ごめんなあ、堪忍なあ、そつまつて謝りながら。

暫く誰も声を掛けなかつた。

タカミチも起き上がりつてエヴァに、全く肝を冷やしたよ、と言つて苦笑した。

エヴァは、フン、謝らんぞ、と言つてそっぽを向いた。

漸く刹那と木乃香が落ち着き始めた頃、近右衛門が口を開いた。

「木乃香や、刹那君がこんな事をしてしまったのも、訳があるんじ
や」

エヴァはその言葉を聞いて、近右衛門を睨みつけた。

この罪を海人に擦り付けようとするなら、徹底的に暴れてやるう
と思つた。

貴様の大事なモノを田の前で斃り殺してくれる、と。

近右衛門はその視線を受け、視線の意味を理解しているのか、そ
んな事はせんよ、と言つた。

木乃香は、何やの？ その訳つて、と聞いた。

刹那は、赤い目で近右衛門を見て狼狽する。近右衛門は、心配せ
んでも、大丈夫じや、そう言つて木乃香に真剣な顔付きで話し始め
た。

「木乃香や。先ずお前には謝らんといかんのう。隠しどつた事は悪
かった。じゃが、この事はお前の父の婿殿の意向もあつたのじや。婿
殿が悪いんじやないぞい。考え方の違いじや。わしも、婿殿も木
乃香の事を大事に思つとるのじや。それだけは信じてくれんかの」
そう前置きして語りだした。

魔法が存在する事。麻帆良の事。自分が関東魔法協会の会長である事。

詠春が関西呪術協会の長である事。二つの協会の対立の事。

木乃香の立場の事。護衛である刹那の事。

それらを言い聞かせる様に話した。

全てを聞き終えた木乃香は、呆然とした。そしてゆっくり吟味す
るかの様に考え出した。

程なくして木乃香は、近右衛門に、話してくれて有難うと言つた。

そして、刹那に今までの事の感謝と、先程の責めた事を詫びた。

刹那は恐縮していたが。

それらを話し終えた後、今まで聞き役だったタカミチが口を開い

た。

「今度は、僕がエヴァに聞きたいね。君は何であそこにいたんだい？」君と重岡君とは、もう何も無かつたはずじゃ？」

そう言つて厳しい視線を向けた。同様に近右衛門の表情も厳しい。エヴァは、どうするか迷つた。事ここに至つては隠し通すのも難しい。どうしたものか、と思案していると、学園長室の内線が鳴つた。学園長が出る。

「うむ。ワシじゃ……な、何じやと！それは真か！……うむ、うむ。あい、分かつた。君はそのままその場で待機しといてくれ」難しい顔をして受話器を置いた。そして

「……重岡君が病室から居なくなつたそうじや……」重苦しい雰囲気で告げた。室内に衝撃が走つた。

「どういう事だ！ジジイ！詳しく述せ！」

エヴァが詰め寄る。近右衛門は

「見回りの看護婦が様子を見に行つた時には、もぬけの殻だつたそうじや。」

「そう言えば、容体はどうだつたんだ？」

「うむ。傷 자체はそんなに深くは無かつたそうじや。ただ、放置されていて時間が長かつた為、出血量が多くつたらしい。それで意識が混濁していたそうじや。すぐに輸血を開始したので、命に別状はないとの事だつたそうじやが……」

エヴァはその報告に刹那を睨みつけた。刹那は俯いて震えた。木乃香は複雑な気持ちだった。

責める事も、許す事も出来ずに、板ばさみになつてゐる。

また室内に沈黙が下りた。その時、また内線が鳴つた。

「うむ。どうした？……な、何じやとお！すぐに、通してくれい。うむ。宜しくの」

近右衛門はため息を付いた。

「今度は何だジジイ！何が起こつた！」

「それがの……今、ここに向かつてゐるそうじや……重岡君が」

そう言つてまたため息を付いた。さつき以上の衝撃が走つた。

エヴァと木乃香は立ち上がり、刹那は真つ青になり、真名とタ力ミチはポカーンと口を開け、近右衛門は嘆息した。

暫くすると、ドアをノックして、失礼します、という声が聞こえた。

近右衛門が、緊張した声で入室の許可を出す。

そして海人が入ってきた。多少顔は青白かったが、足取りは確りしていた。

その姿に木乃香は涙ぐみ、エヴァと茶々丸はほつと息を付き、刹那は顔を白くさせ、タ力ミチ、近右衛門、真名は厳しい顔をする。海人は室内を見回し、

「皆さん、重岡海人、只今復活致しました」
そう言ってニヤリと笑つた。

第5話　凡人は倒れた後に何事も無かつた用に復活する（後書き）

いかがでしたでしょうか。

と、言うか回を追う毎にクオリティが下がりますよね。

難しいです。

アドバイス、感想、お願いいたします。
やる気出ます。

お読み頂き有難う御座いました。

次回から、更新速度遅れるかも……です。
では、また。

第6話　凡人は魔法使いに交渉と取引を持ちかける（前書き）

作者のダメ中年です。

今回は短いです。

ご都合主義満載です。

駄文です。

もうダメボ……

今回、主人公黒いです。真っ黒です。
怒らないで読んでください。

では、どうぞ。

第6話 凡人は魔法使いに交渉と取引を持ちかける

海人が入室して挨拶をした後、それぞれの表情は一変した。

喜ぶ者、責める者、そして、厳しい表情で構える者。

三者三様に別れ、その表情を一瞥した海人は、まずエヴァに声を掛けた。

「エヴァ、心配掛けごめんね？僕なら大丈夫だから。安心して？」
そう言って微笑んだ。その表情を見て、取りあえずほっとしたエヴァだった。

次に声を掛けたのは木乃香だった。

「近衛さんにも、心配掛けちゃったかな？でも大丈夫だから。」
そのセリフに木乃香は泣き崩れた。

よしよし、と頭を撫でる海人。木乃香は、ウンウンと頷く。

「無事で良かったわあ。めっちゃ心配したんやで？明日菜も心配しどつた。後で、元気な声聞かせたってな？」

木乃香はそう言って笑った。その後にハツと気が付いた。ここには刹那がいるのだ。

木乃香は何を言えばいいのか、言葉が出ない。刹那を責める事が出来ないし、かと言って、海人に許す様にも言えない。板挟みで俯いてしまう。

海人はその様子を見て、取り合えず放つて置く事にした。自分が掛けられる言葉など無い、と判断したからだった。

次に海人は真名を見た。海人に取つては初対面に等しい。顔は見た事がある、という程度だ。

「えーと。初めてまして、でいいのでしょうか？学年生徒代表の重岡海人です」

そう言って頭を下げた。それを受けて真名は冷静に海人を分析した。

見た限り悪そうに見えない。強そくにも見えない。至って普通。平凡という言葉が合っている。取り立てて目を引くようなモノは持つてなさそう。

そう判断した。

「ああ。龍宮真名という。クラスは同じだよ。宜しく」

海人は挨拶をかわした後、あなたは何故ここに?と聞く。真名は

渋い顔をして

「その、何だ。私は部屋が一緒なのだよ……」

そう言い淀んだ。海人は、なるほど、と納得した。そして、最後に学園長と、タカミチに視線を移す。エヴァは、表情には出さなかつたが、内心笑っていた。カイ、この状況でどうやつて主導権を握る?

刹那には目もくれない。木乃香がこの場にいる、といふのもあるが。

二人共、厳しい顔付きの上、視線も鋭い。

海人はそれを受けて、首を傾げる。

「あの、お二人共、何故僕を睨むんです?僕が何か悪い事したんでしょうか……」

申し訳なさそうに言った。

しまつた、と近右衛門とタカミチは思つた。

案の定、その言葉に一番反応を示したのは、木乃香だった。

木乃香は学園長に目を向けた。2人が見たのは、木乃香の猜疑心を含んだ目だつた。

木乃香は思った。刹那がこんな事をしたのは、自分を守る為。そして被害者は海人。近右衛門は、自分の祖父。

パズルのピースが嵌つていく様な気がした。

「お爺ちゃん?まさか……」

近右衛門は慌てて言い募る。

「」「木乃香、ワシは重岡君をどうこうしよう等などと思つとらんよ。ただ、心配だつただけじゃ。なあ、タカミチ君」

急に振られたタカミチも、ええ、そうです、としか追従できなかつた。

海人は、内心ほくそ笑んだ。言質は取りましたよ？学園長殿？交渉とは、先に言質を取つた方が絶対的な主導権を握れる。

「も、もう体は大丈夫なのか？重岡君、いや何、病院から、いなくなつたと聞いての。心配しどた所なんじやよ」

「ええ、大丈夫です。完璧とは程遠いですが。」心配掛けた用で「そう言つて笑つた。

今度は、タカミチが声を掛けた。

「それで、君は病院を抜け出して、一体何しに来たのかな？それに、すぐ動けるような傷じやなかつた様な気がするんだけどね」

探るような目つきだつた。海人は瞬時に判断を下す。

この場で一番手強いのは、高畠先生ですね。

学園長は、近衛さんが抑えてくれるでしょうし。言質も取りました。

さて、どうやって事を運びましょうか……。

「ええ。傷はそんなに深く無かつた様です。ただ、搬送されるまで時間が掛かったとの事で……」

そこで、ちらつと刹那を見る。

「まあ、正直に言つと、立つてるのは結構きついです。取り合えず、座つても？」

そう言つてエヴァの隣に座る。

刹那は俯いたまま。木乃香はおろおろ、してくる。

「その、空氣的にこの状況つて……」

そう言つて見回した。近右衛門が代表して答える。

「うむ。この件の事は全て知つておる。しかし、重岡君とエヴァの事じや。この件は言い逃れは出来んぞい」

またもや、厳しい目で見詰める近右衛門。今度は、木乃香の事は無視した様だ。

海人は涼しい顔で

「何故です？僕がエヴァと仲良くしたらいけないんですか？不純異性交遊なんてしてませんよ？ね？エヴァ？」

あくまでも健全な友人のお付き合いです、そつとエヴァに話を振った。

「まあ、確かにカイの言つ不純異性交遊なんぞ、した記憶はないな」

そう言って頷いた。

これには、近右衛門とタカミチはあっけに取られた。この期に及んで何をしらばつくれると言うのか？

「何を言つてるんじや！お主は、1年前に魔法生徒になる事を拒否したんじゃぞ！ワシたちを謀つておつたのか！」

そう一喝した。海人は内心ほくそ笑んだ。

「はあ？魔法生徒？学園長、何を言つてるんでしょう？頭大丈夫ですか？意味が分かりません。僕は、ここにいる桜咲さんに怪我を負わされ、その報告と相談の為に来たんですよ？被害届を出す前に。それに、1年前って何です？何かあつたんですか？僕の身に。記憶も無いのに？だとしたら証拠は？有耶無耶にしようとしてるんですか？それならこっちにも考えがあります。」

そう言い切つた。

そのセリフにエヴァは笑いを堪えるのに必死だった。

タカミチと学園長が気付いたときにはもう遅い。木乃香も聞いているのだ。

「お爺ちゃん！重岡君に何したん？1年前にも何かに巻き込んだんか！そんで記憶を弄くったんか！」

ものすごい剣幕だつた。魔法の事は聞いたばかりだ。この会話だけだったら海人が知らずの内に何かされた様に聞こえる。海人はこの一言で、木乃香が魔法を知つた事を認識した。なるほど。なるほど。

ここに近衛さんがいるのは単に犯人を知つただけじゃないみたいですねえ。

それなら、この状況を最大に利用するとしましょうか。

「えーと、近衛さんまでどうしたというんです？何か知ってるんですか？学園長が言つてる事について」

ここに来て、近右衛門とタカミチは不味い事に気が付く。海人が言つてる事に矛盾はみられない。彼は、刹那の事を報告しに来ただけ。ここに学園長以外の人間がいる事を見る術はない。ここで記憶を見ようとしても、エヴァアがいる。見逃すとは思えない。

エヴァアは友達と言われてしまえば、どうしようもない。

魔法生徒だという決定的な証拠は無い。

近右衛門は歯噛みした。

その瞬間、1年前にここで海人に言われたセリフと出来事がフランクシューバックした。

『僕の記憶を改竄してください。あんな想いはもう嫌です。何で一般人の僕がこんな目に合うんですか？正義の魔法使いと言つたのは嘘なんですか？

一般人なのにこんな目にあうのに、魔法使いになれ！なんて。僕に死ねと言つのですか？もつこんな事が無いようにしてください。

また巻き込まれたら、その時は何でも言つ事を聞いてもらいますよ。

いいですよね？そのくらい嫌なんです！これは証拠です。

皆さん、この録音した物をコピーしてそれを持っていて下さい』

近右衛門は戦慄した。

あれは、この時の為の行動じゅつたのか？

いや、それはない。無いはずじゃ。

そんな恐ろしい事……。

それが正しいなら、ワシらは全て重岡海人、只1人に踊らされていた事になるのじゃから。

近右衛門はタカミチを見た。彼は顔面蒼白だった。

そして、近右衛門が止める前に木乃香が話してしまった。

「魔法つてのがあるんよ！だから重岡君は、1年前に何か事件に巻き込まれてるかも知れん！なあお祖父ちゃんは何か知らんの？これじゃ重岡君が余りにも可哀相や！」

近右衛門とタカミチは頃垂れた。あの場にはエヴァもいた。言い逃れが出来ないのは明白だつた。

まず、近右衛門は、木乃香に聞かせた話と同じく魔法に関する事を話した。

近右衛門が話し終えたところで、エヴァは1年前にここでの会話を録音したレコーダーを取り出し再生した。

海人の声が流れる。再生が終わると、エヴァは何故こんな事になつたか、事件のあらましを話した。

木乃香は怒り心頭。刹那は輪を掛け自分のしでかした事の重大さを。

真名は、初めて重岡海人に恐怖を抱いた。まるで予定調和の様に感じたからだ。

近右衛門とタカミチは押し黙つたままだ。エヴァは笑みを浮かべ茶々丸は変わらず。そして、海人は無表情だつた。

少しの沈黙の後、海人が口を開いた。

「これは、どういう事ですか？」

押し殺したかの様な声だつた。

近右衛門とタカミチは何も答えない。

「どう言つた事かと聞いてるんです！」

机をダン！と叩きながら怒鳴る。嫌な沈黙が流れる。

海人は、自分が主導権を握り始めている事を感じた。

そこで、木乃香の携帯が鳴つた。木乃香がビクッとして、慌てて

出る。

電話を切つた後、苦笑いをし

「明日菜からや。めっちゃ怒つとる……ウチ……一曰帰るわ。重岡君、『じめんな』

そう言つて立ち上がつた。真名も立ち上がり

「送つていいくよ。いいですよね？学園長」

近右衛門は頷くだけだった。木乃香は海人を見て、言いにくそうに「重岡君……あのな？その……全部、ウチが悪いねん

それつきり黙つてしまつ。

刹那がハッと顔を上げ

「違います！お嬢様は何も悪くありません！重岡さん！お嬢様は関係ないんです！私が……私が……」

そう言つて俯いてしまう。

「後で連絡します。神楽坂さんには上手く言つておいてください」

海人は、木乃香にそう言つて退室を促した。

木乃香は一言

「せつちゃん……」

そう言つて真名と出て行つた。

海人は向き直り、近右衛門を真つ直ぐに見詰めた。

近右衛門は眉間に皺を寄せ、難しい顔をしている。

「取り合えず、仕切り直しです。桜咲さんの事は、まず保留にします」

いいですね？そう確認を取る。近右衛門は頷いた。

海人は思考を高速回転させる。

先ず、完全に主導権は握りました。

此処からが勝負です。

慎重に事を運ばないと……。

「先ず、この事について何か言つ事は無いんですか？エヴァの話は真実なんですよね？そして、僕はそれを認ず、無かつた事を選択した。レコーダーの再生からも分かります……」

そこで一旦切つて

「あなたたちは、何がしたいんですか？そんなに僕の人生を自由に

したいんですか？」

そう言つて近右衛門とタカミチを見据える。タカミチは弁解した。

「違うよ！それは誤解だ！僕たちは決して……」

海人は最後まで言わせなかつた。

「じゃあ、何で僕は2度も傷ついた！あなた、教師でしょう！…守るのは魔法関係者だけですか！」

そんなに魔法が大事なら！一般人をココに住まわせないでください！」

そう言つて再度机を叩く。

エヴァは思った。

これで完全に主導権はカイのモノになつた。

後は、落とし所だな。さあどうする？

近右衛門とタカミチはこの言葉が胸に刺さつた。

全く以つて彼の言う通りだ。自分達が確り管理していれば。自分達がもつと目を光らせていれば。

近右衛門とタカミチは海人の策略に嵌つていく。

もう、最初の頃の勢いは無かつた。

刹那は後悔が募つた。

何故、自分はある時刀を抜いてしまつたのだろう。

何故、あの時自肅出来なかつたのだろう。

彼だつて、守るべき一般人のはずなのに。

そして海人は、主導権を完全に握つた事を確信していた。

さあ、フィナーレです。

「取り合えず、僕はレコーダーに録音されていた約束を履行します」

意義は無いですね？」

そう確認を取つた。

2人はぐうの音も出ない。

「その前に、先に桜咲さんの方いいですか？」

近右衛門とタカミチ、刹那に了解を取つた。

刹那はビクツと肩を揺らす。

「それで、この事が大っぴらになると通常はどの様な処分になるのですか？普通に刑事告訴でいいんですか？」

近右衛門が渋い顔で答える。

「通常ならそうじやうじやう。何ら普通の事件と変わらん、魔法を使つたとなれば、オコジヨにされるがの。この場合……言いにくいんじやが、その殺人未遂事件として立件されるのづ。そして、桜咲君は、京都神鳴流を破門じやの。」

刹那は身体をガタガタ震わせる。

その様子を見て海人は

「桜咲さんは、何をそんなに恐れているんですか？あなたは、僕を傷つけた。こうなる事は予測済みではないのですか？」

その問いに刹那はか細い声で

「わ、私は……お、お嬢様を……お、お守りする事が……」

その後は殆ど言葉が聞き取れなかつた。

「僕は言いましたよね？あの公園で、あなたには話せない、と。あの時近衛さんはこう言つたんです。『小さい頃は仲が良かつた。せつちゃん、このちゃん、そう呼びあつて。楽しかつた。キラキラと一番輝いてたつて』思い出して泣いてたんです。だから、僕は仲直りのアドバイスをしたんです。だから、あなたには話す事が出来ない、そう言つたんです」

それを聞いた刹那は号泣した。

このちゃん、このちゃん、と木乃香の名前を叫びながら号泣した。それを、近右衛門とタカミチは痛ましそうに見ている。耐え切れなくなつた近右衛門は海人に声を掛けた。

「重岡君、余り刹那君を責めないでやってくれんかのう。彼女だって、悪気があつてやつた事ではないんじや。この通り、この辺で勘弁してやってくれんかのう」

そう言って近右衛門は頭を下げた。

海人は、なるほど、と頷いた。

「学園長は桜咲さんの為に頭は下げても、僕には頭を下げないので

すね

良く分かりました、そう言つた。

その言葉に近右衛門とタカミチは雷に打たれたかのよつに固まつた。

自分達は彼に頭を下げていない、と。

慌てて2人は頭を下げた。

海人は、今更です、指摘されてから頭を下げるなんて、とにべもなく言いはなつた。

海人は、やはり魔法使い達は信用ならない、と思つた。
結局は自分達が一番可愛いのだ、と。一般人の事なんか気にしてなんかいない、と。

実は、海人は許してあげよう、そう思つていた。

木乃香の表情、刹那の後悔と涙。それらを見て、これが最初で最後、と。

だが、近右衛門の態度で変わつた、この学園長がいる限り、口々は変わらない、と。

ならば、自分の居場所は自分で守るしかありませんよね。

此処で海人はレコーダーをエヴァに用意して貰い、録音を開始する。

「此処に居る皆が証人です。言つた、言わない。それは無効だ！とか、なんて、お互に泥試合なんかになりたくないですから」

いいですよね？そう言つて確認を取つた。

近右衛門とタカミチは嫌な予感がしたが、海人の言う事も分からなくは無い。向こうは、魔法も、魔法使いも信用していないのでからら。

2人はしぶしぶ了承した。

エヴァは楽しみで仕方なかつた。

さて、コイツはどんな要求をして、それを通させるのか。

「桜咲さん。僕としても、はい、このままでいいですよ、なんて言う程お人好しではありません。しかし、このまま訴えれば貴方は、

破門。護衛ではなくなる。そうですね？」

そう言つて確認を取つた。

刹那は泣きながら、頷いた。

「だから、一つお願ひを聞いてもらいます。これを聞いてもらえば、訴えないし、このまま何もしません。何も無かつた事にします」

その言葉に刹那はハツと顔を上げた。

「勿論、死ね！とか転校しろ！だとか、近衛さんに近づくな！とか意地悪は言いません。勿論、抱かせろ！何て事も言いませんよ？」

どうですか？聞いてもらえますか？そう笑いながら言った。

刹那は、顔を赤く染めながらも、その取引に飛びついた。

海人は、お二人もいいですか？と近右衛門とタカミチに了解を取つた。

2人は良く考えずに了承した。そんな無茶な事は言わないだろう、との判断だった。

「ああ、学園長達もさつきの約束の履行、忘れていませんよね？無茶な要求ではないです。桜咲さん次第ですから。桜咲さんが言つたモノ用意してくださいね？」

近右衛門は、何を求めるのか検討がつかなかつたが、刹那が言う事なら無茶は無いだろうと判断した。

「あ、確認です。桜咲さんつて近衛さんが一番の宝物なんですよね？」

？」

微笑んで刹那に聞く。

刹那も、海人から木乃香の想いを聞いていたので、すぐに肯定する。

私の命よりも大事で一番の宝物です！そう言いきつた。

まだ、一緒に居られる！とそう言う想いで一杯だった。

海人は、軽くせき払いをして。

「桜咲刹那さん。貴方には、貴方の一番の宝物を僕に売つてもらい
ます。その対価の用意を学園長、お願ひしますね？」

そう言って微笑んだ。

瞬間、近右衛門、タカミチ、刹那の顔が凍りついた。
悪魔の取引だった。

第6話　凡人は魔法使いに交渉と取引を持ちかける（後書き）

あー、はい。

何も言わないで下さい。

クオリティ下がつていつてるのは

重々、承知で御座います。

もう、主人公、なんなの！？

勝手に動くなや！

すみません……。

感想、アドバイス、怖いです。

送つてくれるも嬉しいですが、

お読み頂き有難う御座います。

感謝です。

では、また。

次は、何時になる事やら……。

第7話　凡人は駆け引きの後切り札を手に入れる（前書き）

ダメ中年です。

第7話お届けです。

何か今回もおかしい。

馱文です。

燃え尽きました。

アイデアが出ず。

時間が掛かってしまい申し訳ありません。

では、どうぞ。

第7話 凡人は駆け引きの後切り札を手に入れる

『貴方の一番の宝物を僕に売つてもらいます。その対価の用意を学園長、お願いしますね？』

この要望の裏に隠された意味を、エヴァは瞬時に理解し戦慄した。刹那にとつて木乃香は一番の宝物と評した。その等価値のモノを見つけること自体難しい。

合わせてその支払いは学園長。自分ではない。つまり、仮に自分の命と等価値とするならば、その命は近右衛門が用意しなければならない。

暗に近右衛門に刹那を殺せと言つてるようなモノ。これが成立するとなると、近右衛門は木乃香にとつて大切な者の命を奪つた事になる。

金品ならば、刹那は木乃香の価値をその程度としか見なしていい、という事になる。

海人は、今まで通りでいい、と言つたが木乃香にあう度に、その罪悪感に囚われる。

近右衛門にして見れば完全に人質という事になる。またその事を木乃香に言つてもいい。

貴方のお爺さんは、貴方を人質に差し出したんですよ、と。

木乃香は、祖父である近右衛門に対して猜疑心が芽生えている。近右衛門に取つて木乃香はアキレス腱と一緒に死んだ。

エヴァは震えた。

600年生きてきたが、この年でこの様な取引を行う奴など見た事が無かつた。

最善以上の最善。

エヴァは思った。心底、カイが味方で良かった、と。

これにいち早く反応し、激高したのは以外にもタカミチだった。

「ふざけるな！君は！人をモノの様に売買するというのが…認めない！そんな要望、却下だ！」

タカミチは怒りに震えた。狂つてゐる、とも思つた。

海人はタカミチを無視して、冷静に

「この要望を飲んで頂けますよね？」

近右衛門にそう確認した。

タカミチが、無視をするな！ そう言つて殴りかかった。

其れすらも海人の策略とも氣付かず。

海人は吹つ飛んだ。壁に叩きつけられる。

今度はエヴァが激高した。

「タカミチ！ キサマ！」

今度はエヴァが殴りかかる所で、海人が起き上がり、エヴァ！ と言つて止めた。

海人は口から流れ出た血を拭うと

「ご立派な正義の味方ですね。高畠先生。貴方、やっぱり一般人の事なんかどうでもいいんじゃないですか？」

先程の誤解だ！ と言うのを撤回して貰いたいです、そう言つてソファに座りなおした。

タカミチは呆然となつた。自分が目の前に居る刹那と同じ事をしたのだから。

タカミチはすぐに謝つた。海人はそれを冷めた目で見詰めて

「申し訳ないですが、本当に悪いとお思いなら席を外して頂けませんか？ 何かの度に、殴られたのでは身体が持ちません」

そう言つて退室を促した。タカミチは俯き肩を震わせた。

「タカミチ君……少し外で頭を冷やしてきてはどうかの？」

近右衛門はそう言つてタカミチを促した。

申し訳ありません、そう言つて出て行く。

もう一度、タカミチは、海人に謝罪した。

海人はその背中に声を掛けた。

「高畠先生。僕は今の所、全ての魔法使いが信用できないのです。

一人を除いて。だから……僕に、2人目を信じさせてくれませんか？』

タカミチは、分かつた、必ず、そう言って拳を握り退室して行った。

室内には、近右衛門、刹那、海人、エヴァ。茶々丸の5人だけとなつた。

重苦しい沈黙が流れる。そこで、エヴァが口を開いた。

「それで、ジジイ。キサマはどうするのだ？この要望を。よもや、怒りに任せてカイに魔法を放つ事などするまいな？」

そう言って睨みつけた。

近右衛門は、そんな事せんわい、そう言って唸つた。

刹那がいきなり土下座をした。

「重岡さん！何とか他の事で償わせて下さいー死ねと言われれば死にます！抱かせろと言われば死くします！だから……だから……お、お願いや……」

そう言って床に額を押し付けた。

海人は躊躇せずに一言、

「却下です」

刹那の土下座を、切って捨てた。

近右衛門が助け舟を出そうとするが、エヴァのひと睨みで押し黙つた。

海人はため息を付き、

「まさか、近衛さんを奴隸にする、とか、手込めにする、とか思つてるんじゃないでしょうね？」

近右衛門と刹那は、へ?と間抜けな声を出した。

海人は、あなたたちねえ、そう言って呆れた声を出した。

「そんな事する訳ないでしょうに。大体ですね、そういう事は好きな人とする物でしょうが。

全員とはいいませんが。僕は魔法使いという人達が口先だけで、自分の自己満足に浸つてる様にしか思えないんですよ。

桜咲さんには悪いですが、僕を切ったのは、言つてしまえば、嫉妬じゃないんですか？

今、この状況になつてみて気付いた事なんですか？」

刹那はそれを聞いて、ビクッと身体が跳ねた。

「2度ある事は3度ある。僕はもう嫌ですよ……。普通に生活しているだけで、命の危険がある街なんて。僕、言つてる事おかしいですか？」

そう言つて近右衛門と刹那を見る。2人は何も言えなかつた。

「お一方には、確り反省も兼ねてこの事を飲んでもらいます。

エヴァが魔法使いというのを知りましたから。近衛さんはエヴァ預かりでいいですね？」

疑う訳では有りませんが、一般人の僕預かりで、襲撃されたらどうしようもないでの。

無理やり記憶を弄られたら溜まつたものではありません

近右衛門がここで幾ら否定しても信じないだろ？

「それに、じう言ついい方は好きではありませんが、売つた、という事は買い戻す事も出来る、と言つことです。その対価は予め言つておきます。僕がこの麻帆良に居る魔法使い達の事を信用出来る様になつた、という事です。」

これには、近右衛門は唸つた。

「勿論、ズルはしません。信用出来るのに、信用出来ない、とか。

そこは其れこそお互いの信用問題ですね」

そう言って、刹那を見据え、

「さあ、桜咲さん。対価を教えてください」

そう言つて返答を迫つた。

近右衛門は、この少年に恐怖を抱いた。

魔法生徒としての資質、素質は平凡。

しかし、其れを補つてなお、有り余る程の恐ろしいまでの策略を生み出す氣質。

末恐ろしいものを感じた。

刹那は、答えることが出来ない。

木乃香と等価値なモノなど、刹那の中には存在しない。
何時までも沈黙が続く。海人はため息を付いた。

「これじゃ、埒があきません。では、こうしましょう。桜咲さんも
エヴァ預かりで」

これには刹那が吃驚した。

「学園長。時間は有限です。桜咲さんは答えることが出来ません。
仕方ないので、取り合えずは答えが出るまで、二人一緒にエヴァ
預かりでいいですね？」

そう言って了承を促した。

それに釣られ、近右衛門はうむ、と首肯した。

その瞬間、近右衛門は悟つた。

これが、重岡海人のシナリオだと、と。

両方とも手に入る。

木乃香の事だ、刹那に何かあれば、全てを知つた今、首を突っ込んで行く。

刹那に関しても、例え、命を失う事になつても木乃香の為に動く。
この要望には、結局は法的、魔法的に何の拘束力もない。
だが、この提案は木乃香と刹那に取つて魅力的なものだろう。
何せ、対価を言わなければいいだけの話しなのだから。

しかし、今更言つても遅い。録音までされ、海人が譲歩した形になつてている。

拒めば、対価を迫られる。

気付いた時には、海人はレコードのスイッチを切つていた。

「エヴァ、絡繆さん、帰りましょう。正直言つてフラフラです。桜
咲さんも行きますよ。では、学園長帰ります。お疲れ様でした」
そう言ってニヤリ、と笑つた。

学園長は立ち上がり、声を掛けようとした。しかし言葉が出てこ
ない。エヴァ達が退出し、最後に海人が出て行く。

そこで思い出した様に立ち止まつてくるりと振り向き、自分のこめ

かみを指でトントンと叩きながら、

「これ以上、記憶を弄られたくないので、僕も魔法生徒になりますね？エヴァが師匠で」

では、そう言つて退出して言つた。

近右衛門は、扉が閉まつた後、どっかりと座り、やられたわい、一言そう呟いた。

帰り道、刹那は無言だつた。ずっと下を向き、とぼとぼ歩いている。

そんな刹那に海人は声を掛けた。

「明日、学校が終わつたら、近衛さんと一緒にエヴァの家に集合して下さい。其れまでは、この事は他言無用です。ああ、もし良かつたら、龍宮さんも誘つて下さつて結構ですよ。詳しい話はその時にいいですね？」

では、お休みなさい、そう言つて刹那を除く三人は去つて行つた。刹那は何も言えず、その姿をずっと見送つていた。

道すがら、エヴァは『機嫌だつた。

何せ、近衛木乃香は、手の内にある。唯一の不安の種である、桜咲刹那も付随してきた。

学園長にに対する圧倒的なアドバンテージを手中に収めたのと同意だ。

エヴァに取つて、言つ事無しの結果だつた。

「そういえば、退出するとき、ジジイに何を言つたんだ？」

海人は、再現しましょつか？ そう言つて、全く同じ事をやつて見せた。

エヴァはそれを知つて大笑いした。

「でも、タカミチには意外と優しかつたな。殴られたにも関わらず」

「高畠先生は、ああ言つておけば勝手に頑張つてくれます。あまり不用意に敵を作る必要はありません。それに、便利ですよ

ね。オートガードって

そう言つてニヤリ、と笑つた。

エヴァはその言い草にかぶりを振つて

「何とも、カイが敵でなくて良かつたと思つよ

そう言つて笑つた。

「僕はね、エヴァ。君の敵に回るなんて事は絶対にない、と断言出来ます。だから怖いのは、精神系の魔法ですよ。操られて、自分の意思で何も出来ない。これほど怖い物はありません」

真面目な顔で言つた。

エヴァは、何、お前なら大丈夫さ、と笑つた。

「しかし、何でお前は、近衛木乃香を手に入れようなどと思つたんだ？」

それだけが、分からん、とエヴァは首を傾げた。

海人は呆れた顔で

「何言つてるんですか。学園長に対してもこれ以上ない切り札じゃないですか。このカードがあれば、エヴァの封印が解けやすくなるんですよ？最終的な決定権は学園長が持つてるんですから」

そう言つて笑つた。

エヴァはそれを聞いて立ち止まり俯いた。その様子に海人は近づき

「どうしたんです？エヴァ？」

そう言つて首を傾げた。

エヴァは、海人の胸に額を当て、抱きしめた。

「お前は……そんな……そんな事の為に……死にそうな目に……遭つたのか？」

海人は頭を撫でながら

「それは、只の結果論です。エヴァは気にしなくていいんですよ？」

そう言つて笑つた。さ、行きましょう、そう言つて促す。

「バカモノ……。暫くじつとしている」

そう言つて回している腕に力を込めた。

海人は、こんな時も偉そうなんですよねえ、そう思つたが口には

出さないでおいた。

そんな2人を月が煌々と照らしていた。
暫く離れた所で茶々丸は、嬉しそうに眺めていた。

翌日の放課後、エヴァの家には、海人、エヴァ、茶々丸、木乃香、刹那、真名、以上の6名が集合していた。

木乃香に魔法を教える事。海人も魔法生徒になる事。要望の事。先ず、これらを伝えて言つた。木乃香は刹那と一緒に居られるのが嬉しいのか、ニコニコしていた。魔法の指導は、日を改めてする、という事になり今は台所で、茶々丸と木乃香、それと、木乃香に引っ張られる形で、連れて行かれた刹那がワイワイと、夕食の準備の準備をしていた。

もう少しで明日菜も来る予定だつた。

夕食の準備をしている木乃香達をみながら、真名は聞いた事の顛末を思い出していた。

思い出しただけでもゾッとする。先に全ての言質を取り、逃げ道を塞ぎ、言い逃れが出来ないように録音。そしてあの極めつけの要望。真名は自分に置き換えてみた。

想像するだけで恐怖する。その時の刹那の心情を考えると居た堪れない物を感じる。

しかし、一番戦慄するのはその要望を出した重岡海人にだつた。真名は海人に視線を移した。

人好きのする笑みを浮かべ、エヴァと談笑している。

真名は興味を持った。何であんな要望を出したのか。

真名は海人に聞いてみる事にした。

「ちょっといいかい？」

そう言つて真名は海人に自分の疑問をぶつけた。

「別に、桜咲さんを本当に、あそこまで苦しめようとして、あんな

事した訳ではないんですよ

そう言って苦笑した。

「刹那さんの事は最初、許してもいいかな、と思つたんですよ。本当に反省している様だつたので。しかし、学園長の態度でそんな気は失せました。あの人ねえ、謝らないんですよ。僕が指摘するまで。それつて、本質的には、自分達は悪くない、と思つてる事に他ならない、そう思いませんか?だから、思つたんです。このまま有耶無耶には出来ないって」

「じゃあこの状況は、学園長の自業自得つて事になるのかな?」

海人は、そうとも言いますね、と頷いた。

真名はほつとした様に

「安心したよ。じゃあ、刹那の事は何もないんだね」

そう言つて笑つた。

海人はにつこり笑つて

「人を切つて捨てておいて、そんな事あるわけ無いじゃないですか」
清々しい程の笑顔だった。

真名は嫌な予感がした。あんな要求をする海人だ。まさかとんでもない事を要求するのではないか。真名の頬に冷や汗が流れた。
「い、一体何を要求すると言うんだい?余りにも度がすぎる要求だと言つたら……」

真名は覚悟を決めたように、海人に厳しい視線を送る。

海人は、がっくりと肩を落とし、

「あの、皆さん何でそんなに僕の事を誤解するんですかね?僕つてそんな悪魔みたいな人間に見えるんですか?本当に心外です。心配しなくともそんな無茶苦茶な事は言いませんよ」

「じゃあ、どんな事なんだい?聞かせて貰えるとあり難いね
真名は警戒を解かずに、厳しい視線のままだった。

「まだ、決めていません。保留ですね」

真名は暫くそのままだつたが、ふっと警戒を解き

「ま、信じる事にするよ。信用を裏切らないで欲しいね」

そう言つてニヒルな笑みを浮かべた。

海人は、もちろん、と言つて微笑んだ。

3人で談笑していると、刹那がやって来て海人に話しかけた。

「あの……重岡さん……ちょっと、よろしいでしょうか？」

エヴァは、刹那の事を許した訳ではない。だから自然に視線がきつくなる。

何か言い掛けたエヴァを海人が押し止め、

「どうしました？」

そう言つて首を傾げた。

刹那の後ろでは、木乃香が心配そうに見詰めていた。

刹那は、意を決したように皆の前で土下座をした。

「この度は、誠に申し訳ありませんでした。」

木乃香はそれを見て刹那の隣で同じ様に土下座をした。

「重岡君、ウチが悪いんや。せっちゃんがやつた事は、確かに悪い事やけど、元々はウチが原因や。許したつて、とは言わん。せやからウチが罰を受ける。お願いや。せっちゃんには何もせんといでや。この通りや」

2人の土下座に海人は苦笑した。

「この際だから、言つちゃいましょうか……。僕があんなお願ひをしたのは、理由があるんですよ。」

そう言つて一人を立たせた。そして、いいですか、と前置きをし、「僕には、桜咲さんが、対価を答えられる訳が無い、と分かつていました。」

だつて、近衛さんの為とはいえ、一般人を斬つてしまつぐらいですからね。

それほど大事だという事でしょう？で、このまま普通に事件にしたら、桜咲さんは近衛さんの側にいられない。

近衛さんは仲直りの機会を失う。

かと言つて、有耶無耶にすれば、僕が貧乏クジを引かされた上に、また同じ様な事が起きる可能性を残してしまう。

では、どうしたらいいか？答えられないお願い、をすればいい訳です。

永遠に時間がある訳ではないのですから。そうなると保留にするしかない」

そこで、一旦切つて、

「いいですか？僕はあの時こう言いました。『桜咲さんは答えることが出来ません。仕方ないので、取り合えずは答えが出るまで、二人一緒にエヴァ預かりでいいですね？』と。そして、それを学園長は了承しました」

二人は首を傾げる。それが、どうした？と。

海人は、まだ分かりませんか？そう言って、

「と、いう事は桜咲さん。貴方が答えを出さずにいれば、何時までも、近衛さんの護衛が出来て、近衛さんはこの間にじっくり話して仲直りはできますよね」

木乃香と刹那が、あつ！と声を上げた。

エヴァと真名は、呆気に取られた。

海人は、微笑みながら、まあ、そういう事です、と締めくくった。刹那は泣きながら、

「有難う御座います……有難う御座います……」

そう言つてまた、床に額を擦り付けた。

木乃香がそれに縋り、刹那の名前を何度も言いながら同じ様に泣き出した。

エヴァは、海人に、それだけじゃないだろう？と小声で聞いた。海人はニヤリ、と笑い、

約束の履行がまだ使われず残っている事。木乃香と刹那に貸しが出来た事。それらを語つていく。

真名は、聞き耳を立てそれを聞いていた。そして思つた。

彼を敵にまわしたらとても厄介な事になる、と。しかし味方にすれば、とても心強い。

腕っぷしはそうでもなさそだが、策略に関しては、自分では足

元に及ばない。

興味と恐怖を込めた目で見詰めた。

海人はその視線を受け、二人には内緒ですよ、と唇に指を当てた。真名は苦笑し、首肯する事で同意を示した。

2人が泣きやみ、少し皆で談笑していた所、明日菜がやってきた。それに、木乃香が慌てる。

「あ、あかん。アスナに詳しい事言つとらん。ずっと誤魔化したまや！し、重岡君、どないしよ？」

海人は、慌てずに、まあ、大丈夫でしょう、と涼しい顔だ。

明日菜はやつてくると真っ先に海人に詰め寄つた。

「アンタ、大丈夫なの！って言うか、大丈夫なら連絡とかしなさいよつ！心配するじゃないの！それで、犯人は！何処のどいつよ！警察に突き出してやるわッ！」

そう捲くし立てた。

海人は、まあまあ、と宥めていい訳を話した。

「心配してくれてありがとう。でも、犯人は見てないんです。後ろからだったから。

桜咲さんはチラッと見た様ですけど。さつき聞いたら、中年ぐらいの男らしいです。

顔は見てないですが。でも、怖くなつて逃げた見たいで。

その後思い出して救急車を呼んでくれたそうです。で、逃げた事に罪悪感があるみたいで……」

そう言ってチラッと刹那を見た。話を合わせる、という事らしい。

「神楽坂さん。すいません。怖くて逃げてしまつたんです」

そう言って頭を下げた。明日菜は、

「そうよね、通り魔だもんね。それは、しあうがないわよね」
そう言って頷いた。

海人は、彼女が単純で良かつた、と思つていた。

「何にせよ。僕はこうして無事でした。後は警察の仕事です。犯人の事はそっちに任せましょ」

そう言つて、皆で、『ご飯にしましよう、と話しを終わらせた。

単純な明日菜はそれを信じ、食べ物の方に興味を持つていかれた。

皆で、食卓を和氣藹々と囲んで、お開きになつた頃には、すっかり夜になつていた。

明日菜は、アルバイトがある為、遅くならない内に帰る、と言つて帰つていつた。

一緒に、真名も帰るという事で、その腰を上げた。
2人を見送り、家には木乃香と刹那の2人とエヴァ達だけになつた。

海人は一人に、この学園に対する不信感を言葉巧みに話していつた。

木乃香は学園長に対し、軽い猜疑心もあつた為、海人の話を好意的に受け止めていく。

刹那は、海人の件と、木乃香と一緒にいたい、という想いがある為、木乃香に追従していく。

話し終わる頃には、すっかり木乃香は海人の事を信用していた。刹那も同様に。

木乃香と刹那にとつては、あんな目に遭つたにも係わらず、自分達が一緒にいられるようにしてくれた恩人に当たる訳だ。

木乃香は喜び、刹那に抱きついて、嬉しさを表現していた。

刹那は、若干顔を曇らせてはいたが。

海人は、その刹那の様子に腑に落ちない物を感じたが、ここでは口に出さなかつた。

木乃香は、自分に出来る事なら、海人の為に何でも協力する、と宣言し、

刹那も、及ばずながら私も、と言つて二人はエヴァの家を後にした。

残つた海人はエヴァに、言質は取りました、そう言つて笑つた。

エヴァはそれを見て、つくづく怖い奴だよ、お前は、と言つて頭

を振つた。

海人は、これでひとまず安心できると思つた。

だが、木乃香がいるという事は関東と関西の両組織に対する火種を抱え込んだに等しい。

其れゆえ、魔法生徒になる事を宣言した。タイミング的には申し分ないだろう。

切り札は手に入れましたが、これからまた大変になりますね、と海人は気を引き締めた。

騒ぎの元凶となる、ネギ・スプリングフィールドが来る8ヶ月前の出来事だった。

だがその前に、ひと波乱ある夏休みがすぐそこに迫っていた。

第7話　凡人は駆け引きの後切り札を手に入れる（後書き）

いかがでしたか？

予想外でしたか？

感想、アドバイスお待ちしております。

疲れた……。

お読み頂き有難うございました。

では、また。

第8話 凡人は夏休みの計画を立てる（前書き）

お待たせしました。

ダメ中年です。

第8話お届けします。

今回も駄文です。

矛盾が有つたりしたらご指摘お願いいいたします。

もう、朝です。

今日仕事なのに……

今回、海人君性格変化してねえ？

もういいや……。

では、どうぞ。

只今の時間もうすぐ午前5時です……。

皆様のおかげで、PV90000超え、ユニーク10000超え達成しました！感謝です！！

第8話 凡人は夏休みの計画を立てる

夏休みを間近に控え、俄かに生徒達が浮つき始めていた。海人のクラスでは、皆が夏休みの計画を話して盛り上がっている。それを尻目に海人も夏休みの計画を思案していた。

夏休みの間に、一回は会いたいとの事で、海人が行くか自分達が帰国するか、決めて欲しいと両親から連絡が有つた。海人としては、麻帆良を離れる積もりはなかつた。

しかし、両親が帰国すれば、自由に動けない。

どうするか、と思案していると、クラスメートに声を掛けられた。

「重岡、先生入り口で待つてんぞ」

考えに没頭しすぎて気付かなかつたらしい。

自分の悪い癖だと反省しつつ、入り口に目を向けるとタカミチがいた。

会釈をしながら、足を向ける。

「すみません。気付かなくて」

謝罪をする海人だつたが、タカミチは気にしていなかつた。

「こつちこそ、すまないね。それで用件なんだけど、今日の放課後、学園長室に来てくれるかい？」

「今日……ですか？ たぶん、大丈夫です。特に用事はありませんので」

海人は快く承諾した。タカミチは、よろしくね、と言つて去つて行つた。

あの事件から、1週間経つていた。

面倒な事にならなければいいんですけどねえ、海人はそう思つた。何事もなく授業が終わり、学園長室へ移動している所、木乃香と刹那にばつたり出くわした。

「あ、重岡君やないの。もしかして、重岡君も呼ばれたんか？」
相変わらずニコニコしている木乃香。

「ええ。もしかして近衛さん達も？」

海人は、十中八九この前の件だるうと想像する。

「ええ。学園長から、お嬢様と私も来るよう」と

刹那が若干不安な様子で言う。

「恐らく、先日の件でしきうね……」

今度は、木乃香が不安な様子で

「なあ、重岡君私達はどうしたらええの？めっちゃ不安や」「木乃香がオロオロしながら、海人の腕を掴む。

海人は、安心させるように微笑んで

「そんなに心配しなくても、大丈夫ですよ。近衛さん達は、普通通りにして下さい。

ただ、学園長達は、エヴァと一緒にいる事にいい顔しないと思いません。

それでも、僕とエヴァを信じてくれますか？」「

海人は確認するように聞いた。木乃香は、もちろんや！、そう言つて笑った。

刹那も同様に信じてくれている様だった。

海人は、二人が信じてくれているなら、そう不味い事態にならないだろうと想像する。

さて。鬼が出るか蛇が出るか……まあ、リラックスしていきましょう。

海人はそう思いながら、三人で学園長室に向かった。

三人で学園長に入ると、そこには学園長を始め、何人かの魔法先生、魔法生徒、それからエヴァと茶々丸がいた。

遅くなりました、そう言って海人は頭を下げた。

そう言いながら、既に来ている人間を観察していく。

瞬時に、大体3タイプに分類を別けた。

好意的な者。敵対まではいかないが、苦々しい顔の者。そして、見極めようとしている者。

取り合えず海人は、自分の立場を暗に示す為、エヴァの横に座つ

た。

木乃香達も、海人の側に腰を落とす。

「エヴァも来てたんだ」

そう言つて笑顔を向ける。エヴァはニヤツと笑つた。
その行動に、顔を良しとしない人間を覚える。

海人達が座るのを待つてから、学園長が口を開いた。

「これで、全員じゃな。皆の者、忙しい所申し訳ない。今日集まつて貰つたのは、他でもない。

先日の事件についてじや。色々と噂が飛び交つておるが、ここで事実を話したい」

そこまで言つて近右衛門は一同を見回した。

その後、事件の詳細を淡々と語つていく。

犯人の所でかなりの動搖があつた。近右衛門は、全てを話し終えてからじや、そう動搖を静め、その後の事を語つて言つた。その後、1年前の事件も話した。

全て話し終えた後、暫く沈黙が続いた。

一番最初に口を開いたのは、女性の教師だった。

「何か申し開きはありますか？桜咲刹那」

その表情には、怒りが見て取れる。刹那はその表情に震え上がった。

それに待つた掛けたのは海人だつた。

「ちょっと待つてもらえませんか？えーと、葛葉先生？この件に関しては、もう結論が出ています。先生には関係ありません」

ピシヤリと言い放つ。それを聞いた葛葉刀子は、眉根を吊り上げた。

「関係ないとはどういう事です！私は京都神鳴流の剣士でもあり、彼女の先輩として……」

海人はそこで、口を挟む。

「ならば、尙更です。これは、葛葉先生だけではなく、ここにいる魔法使いの人達に聞きたいのですが……」

海人は、ぐるりと見回し、

「ここにいる魔法使いの人達は、『正義の魔法使い』と聞いているんですけど……本当にそうなのですか？疑わしいのですが？」

この言葉にいち早く反応したのは黒人の先生だった。

「当たり前だろう！私達は、立派な魔法使いであり、正義の魔法使いでもあるんだ！それを疑うとは、侮辱に等しい！」

声を荒げる。海人はそのセリフに呆れた顔をして

「立派で、正義ですか……。良くそんなセリフを堂々と言えますね。先程の学園長の話しひを聞いて何とも思わないのですか？」

そう言つて黒人の先生を睨む。

「だから、今こうやつて、葛葉先生が桜咲君を……」

またも最後まで言わせず、海人は口を挟む。

「あのですねえ。桜咲さんの前に、僕には何もないのですか？」

先ず、謝るのが先なんぢやないですか？教師として、立派で正義な魔法使いとして。

僕は全て聞いてるんですよ？1年前にも僕は言つてるぢやないですか。

こんな事が起きないようになつて。そんな事だから信用出来ないんです。

先に謝罪が道理でしょ？そんな道理を踏み外している人が、桜咲さんを責めるなどと、どうして出来るんですか？」

そこで、一旦切り、

「学園長にも言いましたが、本当に貴方達は、一般人の事を考えています？僕には、守つてやつてる、という意識が強すぎるような気がするんですが？」

そこそこの所どうなんでしょう？そう言つて見回す。

皆が、そうだった、とバツの悪い顔をする。そこで海人は追い討ちを掛けるように

「皆さんのが正義を自称するのなら、一片の取りこぼしも無く、全てを救つてから言つてください。言つだけなら誰にでも出来ますよ？」

そのセリフに口々に謝罪をします。

「この件に関しては先日、学園長と僕、それと桜咲さんの間で話しあは終わっています。

学園長にも了承を得ています。皆さんがあくまで口を挟む余地はないと考えております。

そうですよね？学園長？

そう言つて、近右衛門に確認を取る。近右衛門は苦虫を噛み潰したかの様な顔で、首肯した。

これに納得がいかなかつたのが黒人の教師、ガンドルフィー二だつた。

「学園長！確かに彼は被害者かも知れませんが、これは認められません！」

ましてや、あのエヴァンジェリンなんかに、身柄を預けるなどと言語道断です！

何かあつたらどうするんですか！重岡君！君も！アレなんかに近づいたらいけない！

アレは、悪の……」

そこまで言つた時だつた。室内の温度が一気に冷えた気がした。そこにいる皆は、エヴァを見た。

エヴァが黙つて聞いているはずが無いと思つたからだつた。しかし、この空氣を作つたのはエヴァではなく海人だつた。海人は、無表情になりドスの効いた低い声で、

「少し黙れ、お前」

たつた一言そう告げた。

海人の豹変振りに、その場にいるエヴァも含めて全員が驚愕した。海人は何時だつて、丁寧な話し方を崩した事がない。

エヴァすらも聞いた事がない声音だつた。

ガンドルフィー二はその豹変振りと、教師に対するその物言いに口をパクパクさせた。

「教師とあらう者が生徒に向かつて、アレ、だと？近づくな、だと

？何様のつもりだよ？アンタ

見据えながらガンドルフィニーにそう言い放つ。

ガンドルフィニーは、そのセリフに

「きょ、教師に向かつて、何て口の効き方だ！そ、それに君は知らないかも知れんが、アレは『闇の福音』と言つて600万ドルの悪の賞金首で人殺しなんだぞ！君は、それを知つて……」「そこまで言いかけた時、海人が動いた。

海人は、ガンドルフィニーのネクタイを掴み、引き寄せ、彼の首を掴み喉仏を親指で抑えた。

ガンドルフィニーはとたんに噎せる。

海人は彼に視線を合わせ、

「それ以上言つてみる。一生声を出せなくするぞ？」

またもや、ドスの効いた声で言い放つ。

それに動いたのは、近右衛門とエヴァだった。同時に声を掛ける。

「やめんか！」「カイ！もういい！もういいんだ！」

その二人の制止に海人は、手を離す。

海人は、深呼吸をし、ガンドルフィニーに謝罪した。

ガンドルフィニーはまだ噎せていた。

海人は皆を見回し、今度は皆に謝罪をした。

「皆さん、申し訳ありません……。

ですが、僕はエヴァの事を、皆が思つてる様な子ではないと思つています。

皆さんは、彼女のやつてきた事を実際に見たのですか？何か彼女にされたのですか？

人の話を鵜呑みにしてるだけの話じゃないのですか？

例え事実だつたとしても、何かの理由があつたかも、とは考えなかつたのですか？」

そこで一旦切つて、刹那に目を向けてから、

「先日の桜咲さんの件も、皆さん現場で見て無いでしょう？」

この話を聞いて、皆さんは、桜咲さんがやつた、と信じたのです

か？違うでしょ？

一瞬でも疑つたんでしょう？何故彼女は疑つて、エヴァは違うんですか？それに……」

そこで深呼吸をし、怒鳴るように声を荒げた。

「自らを立派で正義と言うのなら！自らが悪と罵る存在すらも、救つて見せろ！それこそ立派で正義だらうが！！」

そう吼えた。これには一同が絶句した。

エヴァは、その姿に少し涙ぐんでいた。

この麻帆良で、何時でも、何処でも、何があつても味方でいてくれる、そんな存在。そんな海人に愛おしさが込み上げてきた。

「失礼しました。ですが、これが僕の正直な気持ちです。

僕は、エヴァ以外の魔法使いを信じられません。

近衛さん、桜咲さんは、このままエヴァ預かりを変える積もりはありません。

それと、僕の方が間違っている、そう言つのなら……何時でも、相手になります。

その時は、僕の全てを使って抵抗します

力強い瞳でそう宣言した。

行きましょう、皆。そう言ってエヴァ達に声を掛けた。皆が先に出て、海人が最後に出る。その時、海人は近右衛門に確認を取つた。「学園長、先日も言いましたが、僕も魔法生徒としてエヴァに師事します。同様に近衛さんもそれでいいですよね？彼女もそれを望んでいるようなので」

近右衛門を見詰めそう言つた。
近右衛門は、数瞬考え、うむ、あい分かつた、と首を立てに振つた。

海人は一礼して部屋を後にした。

残された部屋には沈黙が落ちた。海人のセリフにそれぞれが考えている。

少しして、近右衛門は、タカミチに目配せをした。

タカミチは苦笑し、首肯して、出て行つた彼らを追いかけた。

学園長室を出て皆は暫く無言だつた。

一番最初に口を開いたのは木乃香だつた。

「それにしても、めっちゃ怖かつたわあ。重岡君怒ると、あるいは
感じになるんやな。びっくりしたで」

それに刹那も同意する。エヴァは無言だつた。

木乃香がエヴァに視線を向け、ニンマリと笑う。

「それにしても、エヴァちゃん。愛されどるなあ。めっちゃええな
あ。うらやましいわあ。ホンマに」

そう言つて、刹那に視線を送り、指差す。

エヴァは、海人の制服の後ろを摘んでいた。

それを見て刹那も木乃香に便乗する形で口を開いた。

「ええ。全く。羨ましい限りです。エヴァンジェリンさんも満更で
はない様ですし」

「そいやな。これが、ラブラブっちゅうやつちゃな。」

二人してウンウンと頷いている。

それを聞いたエヴァは、当然怒り出す。

「な、何を言つてる！キサマ等！何がラブラブだ！いい加減な事言
うと……」

そこまで言つて、気が付く。木乃香と刹那は、指を差している。
それを辿つていくと、無意識の内に自分が海人の制服を摘んでいる
事に。

一気にエヴァの顔が真っ赤になる。それを見て二人は笑つた。
海人はエヴァの頭を撫で、僕は嬉しいですよ？と言つて笑つた。
海人の行動に、エヴァはさらに真っ赤になった。

エヴァはうがー、という感じに怒り出す。

三人でエヴァを笑つていると、タカミチが駆けて追いかけてきた。

「高畠先生。どうしたんです？」

海人が代表で聞いた。

「うん。重岡君のセリフに皆、結構堪えた見たいでね……。僕もその1人さ。僕は、君に謝罪とお礼を」

タカミチはそう言って頭を下げる。

「今まで本当に申し訳なかつた。それと……ありがとうございます。君のお陰で、初心を思い出したよ」

海人はそれを見て、微笑んだ後、頭を下げる。

「こちらこそ、生意気を言いました。すみません」

そうして二人は笑つた。

タカミチはエヴァに視線を移し

「エヴァ、良かつたね。重岡君みたいな人が現れて。安心したよ」

エヴァは、フン、と鼻を鳴らした。若干顔が赤かつたが。

タカミチは海人に向き直り

「また後日、学園長と話し合いがあると思う。近衛君の事で。その時には皆同席してもらいたい。いいかな?」

そう確認を取つた。

海人は、まだ、何か?と聞いた。

「うん。魔法関係でね。ちょっと複雑な事情があるんだ。だから、皆で話したいんだ」

皆は、取り合えず了承した。

タカミチは、また、連絡するよ、そう言って去つて行つた。

木乃香、刹那と別れ、エヴァ達三人は帰り道を歩いていた。

海人が、じゃ、お休み、と言つて離れようとした時、エヴァが引き止めた。

「今日は……その……何と言つか……嬉しかつた。礼を言つ」

そう言つてそっぽを向いた。

その様子に海人は吹き出した。

茶々丸は真面目に

「マスター。それでは説得力がありません」

そう言つてダメだしをする。

エヴァは恥ずかしいのか、このボケ口ボ！と言つてゼンマイを巻きはじめる。

その様子に海人は微笑み、エヴァを後ろから静かに抱きしめた。

「僕はエヴァの味方です。許す限り君の側にいます」

エヴァは、海人の手に自分の手を重ねて、そんな事は知っているさ、そう言つて目を閉じた。

暫くそうして、どちらからとも無く離れ、笑つた。

茶々丸は、嬉しそうに、その様子をずっと録画していた。

後日、学園長室には、数人の魔法先生にタカミチ、エヴァ、海人、木乃香と刹那が集められ、先日にタカミチが言つていた話し合いが始まっていた。

「話というのは、木乃香の事じや。婿殿の意向としては、木乃香には魔法の事は教えない、と言つておつたが、現状では、もう知つてしまつてある。何故ばれたかを説明せんといかん訳じやが……」

そう言つて、刹那を見る。刹那は小さくなつていてる。

「そもそも、何故、教えない、という結論になつたのですか？」

海人が疑問を口に出す。

「それなんじやが、婿殿は、木乃香には何も知らず幸せに暮らして欲しい、との願いが有つたみたいでのう」

海人はそれは、難しいでしようねえ、と呴いた。

「もうすぐ夏休みです。近衛さん達は里帰りはしないのですか？」

海人は、木乃香に聞いた。

「んー。今の所、予定はあらへん。何かあるんか？」

木乃かは首を傾げた。

「もし、その予定があるなら、僕も謝罪しに行つた方がいいかな、と。それに桜咲さんの件もありますし。直接出向いた方がいいかなと思つたんです」

木乃香はそれに飛びついた。

「それは、ええ考えや。せつちゃんも一緒に行いりや。皆で行つたら楽しいで！」

木乃香はノリノリだった。

この場にいる葛葉刀子も賛成した。

「一度、向こうに帰るのもいいかも知れません。重岡君も一緒に行ってくれるなら、あり難いです」

海人は、エヴァに視線を移し

「エヴァも一緒に行つてくれますよね？近衛さんはエヴァ預かりなんですから」

そう言つてエヴァも誘つた。エヴァはそれに難色を示した。苦虫を噛み潰した様な顔で

「私は、無理だ。麻帆良から動けん」

エヴァは不思議に思つた。何故こんな事を今更に聞くのか。

海人も此処を離れられないのは知つてゐるはずなのに。

海人は首を傾げ

「どうしてですか？」

今、初めて聞いたように首を傾げた。

エヴァは、何か考えがあるのだらうと思い、自分の呪いの事を話した。

「ええ？それじゃ学校行事で、外に行く場合はどうするんです？」

エヴァは、参加していない事を告げた。

これに反応したのは、海人と木乃香だった。

「なあ、お爺ちゃん、何とかならんの？これじゃ、エヴァちゃんがあんまりや！」

海人も難しい顔で、

「学園長？これも正義ですか？」立派ですね。学校行事にさえ出席させないなんて。それにしても、エヴァ、自分の魔力で何とか出来ないんですか？」

不思議そうに聞いた。

痛烈なイヤミに近右衛門はバツが悪そうに唸つた。

「ああ。私は魔力封印されているからな」

忌々しそうにそう告げた。

海人は暫く思案し、

「その呪い、登校地獄……でしたつけ？それって、何時まで続くんです？それと、一緒に魔力も封印してしまった物なんですか？」

この質問に近右衛門が焦つた。エヴァはハッと気付いたように近右衛門を睨み付ける。

近右衛門は、冷や汗をだらだら流し始めた。

「何か知ってるんですか？学園長？立派な正義の魔法使いが騙したり、嘘付いたりしませんよねえ？」

意地の悪い笑みで聞く。

近右衛門は、エヴァがここに括られてる訳を話した。

海人は、眉根を寄せ

「3年以上経つてたのに、何もしないんですか？って言うかこの呪いを解く手段本当に探したんですか？そうなると、エヴァの魔力封印にも一枚噛んでるんじゃないでしょうね？」

海人は睨みつけた。

「15年も中学生をやらせて、魔力封印して、警備員として働かせ、悪の魔法使いと罵る。いや、ご立派です。ご立派過ぎて、好きになりましたよ。反吐が出るくらいにね」

そのセリフに近右衛門はたじたじとなつた。

木乃香もかなり怒っている。

「お爺ちゃん！最低や！もうウチは口利かん！」

そう言つてそっぽを向く。その木乃香の様子に泣きそうになる近右衛門だった。

「分かった、分かったから。何とかする方法を探すから、そう年寄りを苛めんてくれんかのう」

海人は内心ニンマリとし、封印解除、第一段階成功と思つた。

「では学園長、お願ひしますね。後で分かりません、出来ません、は聞きましたよ？」

木乃香もウンウンと頷き、

「ウチも、出来るまで、口、利かへんからな！」

近右衛門は難しい顔で唸つている。

「では早急に、あちらに行けるようにして下さいね。目途が立った
ら、連絡してください。」

葛葉先生もスケジューリングお願いしますね

刀子は快く請け負つた。

近右衛門は、力無く頷いた。

では、行きましょう。海人はそう言って立ち上がつた。

最後に海人は近右衛門にこう告げた。

「言質は取りましたからね。皆が証人ですよ? 嘘の付かない、立派
で最強な魔法使いである学園長殿? 高畑先生、ちゃんと見張つてて
くださいね」

近右衛門は、それを聞いてグハア、と行つて机に突つ伏した。

それをタカミチと刀子は苦笑して見ていた。

学園長室を出たエヴァはご機嫌だった。

麻帆良の外に行けるかも知れないのだ。それも自分が大好きな京
都に。

ご機嫌なエヴァを見て海人は嬉しかった。

木乃香も、皆で旅行気分で実家に帰れる事に嬉しさを感じていた。

刹那もそんな木乃香を見て喜んでいる。

海人は、何事も無ければいいんですけどねえ、と警戒は怠らない
ように気を引き締めた。

第8話 凡人は夏休みの計画を立てる（後書き）

いかがでしたでしょうか？

後、1、2話挟んで原作に入る予定です。

こんな事やつてるから、バツーになるんだよなー。

やべえテンションおかしい。

お読み頂きありがとうございます御座いました。

次回更新は遅いです。絶対。

見捨てないで下さい。

感想、アドバイス、お待ちしております。
では、また。

教えてください！

皆様、作者のダメ中年です。

感想、アドバイス、ありがとうございます。

返信を返せていないですが、読ませていただいております。

申し訳ありません。

続きを、早くアップする事で、返信の変わりになれば、と思っています。

自分勝手な作者ですみません。

実は、作者は原作を殆ど読んでないんです。

それで、エヴァの登校地獄について、詳しい方がいれば教えていただきたいのです。

登校地獄と学園結界の関係性。

登校地獄は、ナギが解くか、ネギの血を吸つて解除する以外に、本当に方法は無いのか？

登校地獄は、掛けた本人が死んでもそのままなのか？

登校地獄に、期限はあるのか？

エヴァの過去のクラスメートで、卒業後にエヴァの事を覚えている人間とそうでない人間の違いは？

仮に、一般人と、魔法関係者の違いだとするなら、その決定的な差はどういった部分で判断されているのか？

また、登校地獄という呪いは、そういつた識別が出来るほど高度なモノなのか？

などなど……です。

少し調べては見たのですが、登校地獄について詳しく書かれているサイトが見つけられませんでした。

今の、物語の続きを書く上で、この辺を曖昧にしたくないのである程度の、納得いく解除の仕方を書ければ……と思っています。

半分、ネタばれになってしまいますが、ご協力お願ひいたします。
後、この続きの展開の要望というか、方向性があれば、言ってくださいね。参考にしたいと考えております。

無知で情けない作者ですが、どうか皆様力をお貸しください。
宜しくお願ひいたします。
これからも頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5547y/>

不变の意思を持つ凡人は高みに上る

2011年11月26日20時57分発行